Yoshimachi, Yoshio
Kokugo hogengaku Kyushu
no hogen

国語 方言学

九州の方言

吉町義雄

國語科學講座

—Ⅶ—

國語方言學

九州の方言

吉町義雄

株式會社
明治書院

國語科學講座

― XII ―

國語方言學

九州の方言

吉町義雄

株式會社
明治書院

目次

九州の方言

吉町義雄

一　序説

古人に由つてその形を木菟(つく)に譬へられた九州の島に住む人々の操る言葉が文政の中心地方の人士に如何に映じたかは既に第八世紀に集成された日本の最古の典籍に於て現れてゐた。『肥前風土記』松浦郡は値嘉島の條に、

此島白水郎容貌似二隼人一。恆好二騎射一。其言語異二俗人一也。

と見え、『萬葉集』巻十一上「寄物陳思」に、

早人名負夜音灼然吾名謂孋恃

はやひとの　なにおふよごゑ　いちじろく　きみがなのらせ　つまとたのまむ

とあるのは當時南九州が全く塞外視されてゐた事實が純朴なる筆緻もて描かれたものに外ならないが、時代は降つて相當中央との接觸が頻繁であつた中世の北九州にあつても『源氏物語』玉鬘の巻に記さるる肥後の大夫の監(けん)が文はよ

こしても手は穢い上に、

ことばぞいとだみたりける

で到底纖細なる都乙女の氣持に適ふ筈はなかつた事になる。

以後相當重要視された筑紫勢の武士詞などが軍記物に見當らないのは一寸物足らないが、近世初頭以來乏しいながらも九州語がぽつ〳〵錄される頃に於ても矢張り上方では受けがよくなかつた。細川幽齋が『**九州道**(みち)**の記**』(天正十五年一五八七)に記す彼の博多邊で詠んだ、

あまさかる　ひなには猶そ　居たむなき　どつこもおなじ　浮世なれども

を何の根據あつてか、伊勢の谷川士清はその『**和訓栞**』首卷(安永六年一七七七)の「大綱」〇言語其方俗云々に於て、

九州の方言をよめる也

と裏書したが、實に幕末の薩摩藩士伊地知季安が『**漢學紀源**』卷三にある彼の禪門の碩學南浦(名は玄之字は文之)が慶長四年一五九九上洛して東福寺に大學を講じた時、禁廷に召されようとした(年月不詳)が、その薩摩訛が祟つて中止となつた逸話などを想へば無理もないと思はれる。

足利末期又は以後のものと思はれる著者不明の『**人國記**』には九州に關して言語の批評は僅かに、

筑後國　言語ヲ飾ル事猶以テ鮮シ

肥前國　音聲ハ卑劣ナリ

の二箇國しか存しないが、備中の古川古松軒が『**西遊雜記**』七卷(天明三年一七八三)には、

豐前國　九州のうちにては上國といへども、中國筋にくらべ見れば人物言語劣りて(卷之二)

豐後國　人物言語も中國筋とは甚劣し事にて(卷之二)

日向國　人物言語も賤しく、豐後を下國と思ひしに今一段劣りし下々國なり(卷之三)

大隅國　此國も日向と同じ風土にて、上方筋中國筋にくらべ思へば何もいはんやうなき下國にて、人物言語賤しく諸品不自由なり(卷之三)

薩摩國　言語も國なまりとて解し難く(中略)言語は聲高にて、尻はりの吟の强き者ゆへに、甚だ解しがたし。中以下におゐては一笑せる言多し(卷之四)

肥後國　人物言語は薩摩よりは少し勝れしやふなれども(中略)何れも聞きなれぬ言散おかしかりき(卷之五、日奈久)

筑後國　風土肥後よりも勝れし國ながら、人物言語の風俗は粗同じ(卷之六)

肥前國　長崎より是までの婦人の言語甚あしく、口早にて跡ばり故に賤しき婦人のものいひは聞がたし(卷之七、その本)

筑前國　人物言語もあしからずして(卷之七、福岡)

とある。併し此の人も豐後などで、

しかれども花はよしの人は武士にて城下々々は人物言語もいやしからず、中國筋にかはりし事もなきなり

としてゐるのは、肥後の中島廣足がその『橿のしづ枝』二卷（嘉永六年一八五三刊）の上卷「にしの國のうた」に於て、

今の京人、西國を詞いやしといふめれど、そはいにしへをしらぬ也。西國には今も古言の多く遺れる、其古言やがていにしへの都人のなれば、西國詞ぞ中々にいにしへの雅言には近かるべき

とする辯護とは又異つて、筑紫洲に於ける古來からの標準語を指してゐるものと解せられよう。

きるにしても、九州方言は坪内逍遙博士の『一讀三歎當世書生氣質』（明治十八年一八八五）第一回に見える方言意識を轉期として、新なる觀方をしなければならない。以下吾人は左の記述に由つて讀者の批判叱正を仰がうとするのである。

二　記　録

1　東　洋

『後漢書』は光武帝紀中元二年（西暦五七）の記述に關係付けられる天明四年（一七八四）筑前志賀島出土の「漢委奴國王印」は暫く措いて、第三世紀に物された『三國志』の「魏志」卷三十「東夷傳」の「倭人傳」條下に錄される「卑狗」「卑奴母離」「柄渠觚」などの官名や「卑彌呼」「卑彌弓呼」などの人名の「卑」「柄」なる文字に含まれるP音は、總じて當時の日本語一般通有性とも見做される一方に、現代琉球語の狀態から推して、當時既に主として九州及び以南の地方に於てのみの特殊相とも受取られるから、近畿說と九州說とに彷徨未決の「耶馬臺」地名問題の新說管見は時々怠つてはならないのである。

以後一千數百年間を經て時恰も日本語の一大變轉期に際し出現する資料に於ては、九州方言はその地方的特異性を明確に構成して來て居るが、吾人は是等を何れも海を隔てる支那・朝鮮さては琉球の三方面から得られるのである。

民族本『華夷譯語』に含まれる明の揚振が『日本館譯語』(1)は十五世紀のものと見られる樣であつて、以後此の語彙集は數多の書物に模倣轉載されたが、音聲や殊に單語は兎も角としてその十八門約五百七十語句の中で、

天晴　　咬喇那法里的　（天文門）

船來　　福聶那急答里　（器用門）

等に於ける助辭「那」（二〇）は所有格のもの以外に十餘箇を拾はれ、殊に上例の如く主格に接續する場合は無視出來ないと思ふ。

明の嶭俊が『日本寄語』(2) は十六世紀頃のものと推され、是亦以後『籌海圖編』『武備志』等幾多の同系統資料に引用轉載されてあるが、その十五類三百六十餘語句の多くの標準共通語彙中只一箇拾へる

小發師　（通用類）

は、「ほそい」（小さいの意）なる意義轉用がこの場合九州味を漂はすものとして尊重し度いと思ふ。

萬曆十七年（一五八九）に和寇を防いで功のあつたと云ふ明の侯繼高が『全浙兵制』の附錄を爲す編者不明の『日本風土記』(3) 五卷は、『日本館譯語』や『日本寄語』特に『籌海圖編』の影響頗る多きものを含入すると考へられるが、當時の九州方言の性質を伺ふには前述二書では全然見られない絶好の材料を吾人に提供して呉れるのである。この中で卷之四所收の五十六類約千百六十語句は當時の浙江邊の支那音を示す漢字と拙劣時に判讀に苦しむ平假名とを以て和語を採錄してあるが、

至誠人（莫打許多）　　またい人　（人物）

溫奴貴　　ぬくい　（寒溫）

無禮人（擲乃許多）　　かいな人　（同上）

の如き語義方面が生命のものは、中央の殊に文學語には餘り見られまいものゝ、地方訛語としては強ち九州のみが獨占と云ふ譯には勿論行かないから甚早遠慮するとして、語法方面に關して摘ひ得る實例を一通並べると

風息革熱勿革那　かせふく（天文）
風好搖梠革熱　よか風（同上）
日出虚路一字那　ひいつる（同上）
日入非路骨那那　ひのくるる（同上）
天開天氣搖革　てんきよか（同上）
潤伏陸革一潔　ふかいけ（地理）
河伏𥳑革一潔　ほそかけ（同上）
善人搖革許多　よか人（人物）
極好人一蓋達日搖革許多　（同上）
生得好眉眉搖革　（同上）
酔四革　すいか（調和）
甜阿審革　あまか（同上）
辣革辣革　からか（同上）
煮不熟和六尼也打　おろにやた（炊煮）

船漏油那一魯　ゆの入　（船具）

などは、邦音を示す漢字の錯誤や平假名の脱落を補正して「革熱那勿革　かせのふく」「虚那一字路　ひのいつる」「非那骨路路」「ふとかいけ」「ほそかいけ」「いかにもよか人」「みめよか」と讀下す時、主格助辭「の」、形容詞語尾「か」、否定副詞「おろ」（餘り—ない意）に於て儀禮的衣裳を脱した純眞なる九州方言の脈膊鼓動を何人と雖も肯定しない譯に行かないであらう。

以後も在り餘る支那典籍の中には勿論相當の資料のある事は想像されるのであるが、今迄の所では別系統のものとしては數百年を經て光緒癸未（一八八三）の序ある王蕊の『東語簡要』(4)と云ふ南支那音で長崎邊の土語を寫し混じた小冊子しか報告されてゐないのである。

成化七年（一四七一）に成つた朝鮮の申叔舟が『海東諸國記』の附錄「琉球國記」最後の項を爲す「語音翻譯」(5)には弘治十四年（一五〇一）の奥書があり、明末の琉球語彙を朝鮮人が採蒐したのであるが、此の約百七十語句に於て只一例

清酒　요가사긔

は「良か酒」の義であり、即ち當時鹿兒島邊から琉球へ輸入されてゐた泡盛・南蕃酒を指すのである(6)。九州方言「よか」の年時的記錄として尊重す可きであらう。

壬辰の役に俘虜として日本に來り在留十年に及んだ朝鮮の康遇聖が『捷解新語』十卷の原稿は五十餘年後の康熙十五年（一六七六）に刊行されたが、此の日本語學資料には

마이리마루시따렌도모　　낀주까이마루수루
まいりまるしたれとも　　きつかいまるする

の如く、(7) 今日の「ました」「ますする」に當る所に悉く「る」を入れてあり、是は無論當時の「まらする」(參らする)から出て今日の(ます)へ遷(す)の過渡形ながら、若し當時に於ても總じて「る」以外の良行音を悉く單なるL音もてする對馬方言要素と見做し得られるとすれば、(8) 吾人に取つて逸し難き對象となる筈である。因に是より百餘年後の崔鶴齢の手になつた乾隆十六年（一七五一）刊の「重刊捷解新語」十二卷では、既に可なりの語彙變化さへ看取されるが、「まいりました」の如く「る」は全く消えて了つてゐるのである。(9)

十六七世紀に結集された琉球聖典『おもろさうし』(10) には第十九卷の十章に「みしやこ」を註して、

　能か事と云事乙

とあり、全廿二卷の殆ど各卷には「よかるひ」「世かるひ」「ゆかるひ」「きやかるひ」「きやきやるひ」「きや／＼るひ」が頻出し、この聖典の註釋辭書ともなる康熙五十年（一七一一）編纂の『混効驗集』(11) 坤の卷には

　みしや子　善子と云詞也（人倫）

　きや／＼る日　よかる日をいふこと也（言語）

と見えるが、何れも九州方言「よか」が室町期に輸入されたのである。(12) 又此の聖典の第十四卷の六十二章には、

　みづなきやん、まみき、いぢやす、まくに

云々とあり、是は「水無きやんも神酒出ぢやす直國」の意であつて九州方言「なか」に否定辭nが添ふたのであるし、(13)

嘉靖二十二年（一五四三）建立の「やらざもり城の倭寇碑」（現存せず）に、

　むかしからかぢよくいくさのきちやることはなきやものやれども

云々とあるのは、「昔から海賊外寇の來たりしためし無しといへども」の意であつて「なきやもの」は同じく「なかもの」が轉じたのであるが、(14) 此の方は九州方言「なか」の記錄年時明白なる物として記憶さる可きである。

2 西洋

西洋人の記錄は何れも近世に入つてからであるのは當然であつて、總じてその文字組織に由る音聲描寫の精緻さは東洋方面の資料では到底企圖し得ない樣な點があるのであり、彼等は浪漫系の所謂南蠻人と日耳漫系の所謂紅毛人とに二大別されるが、特に前者は日本語の一大變轉期に際して廣く國語史上に於ても甚大なる功績を殘して居るのである。

葡萄牙の布敎士ジウアゥンルドリギシ (João Rodriguez)(一五五九生―一六二〇歿)が慶長九年(一六〇四)より十三年へ掛けて長崎耶蘇會學林から刊行した『日本文典』(15)(Arte da lingoa de Iapam)三卷四折版計二百四十丁には、當時の日本の口語及び文語の諸現象を說く事詳細なるものがあり、口語は主として京都竝に近畿地方のものを標準としたのであるが、外に日本の諸所に於ける方言卽ち當時所謂「國郷談(クニキヤウダン)」の記事が散見し、特に第一六九丁表の「或國々に特有な言葉遣ひや發音の訛謬について」と題する以下の文面二丁分(16)には得難き記述が纒まつてあるのである。是に由ると當時日本の方言は畿内を稱する上(カミ)と九州を呼ぶ下(シモ)とそして關東との三大別があつた事が推され、下卽ち九州に關しての記述が比較的に詳しいのは布敎士からも最もよく通曉して居たからであらう。抑々當時の日本口語の標準的發音には次の區別があつた。ルドリギシの九州方言學に於ける功績を認識するには、少くとも左の事項だけは心得て置く必要がある。

オの長音にはアゥから出た開音のアォー、カォーの如きものと、エウ又はオウから出た合音のオー、コーの如き二種があつた。

ガ行音とダ行音との直前の母音は少し鼻音化してゐた。

デ・ジとヅ・ズとの發音の區別があつた。

今のセ・ゼはシェ・ジェと發音した。

ハ行はファ・フィ・フ・フェ・フォと發音した。

次に貴重なる一六九丁裏から一七〇丁表へかけて二頁分の九州方言記事を全部謄載する。(17)

豐後(ブンゴ)

◉この國のものも、やはり、ひろがり(Firogari)を過大にする。さうして、その物言ひには、世によく知られた野鄙な響がある。

◉中國に於ける如く、打消動詞ザルを用ゐる。習ワザッタ、上ゲザッタレバ、シェザッタのやうに。

◉Iの前のE、Oをiに變ずる。例へば、レイ(禮)をリイ、フェイ(塀)をフィイ、ヨイ(好)をイイ、フィイキをフェイキといふ。猶多くの同樣な語に於ても亦さうである。

◉又Iと發音するものを彼等【豐後のもの】はEiといふ。例へば、ミーサ(Missa)をメイサ、リーノ(Lino)をレイノ、カタリーナ(Catarina)をカタレイナといふ。

◉どんな動詞でも、敬稱には、御参(ヲマイ)リアル、参(マイ)ラルルの代りに、マイリシャル、クイシャッタ、シシャッタ、讀ミ

シャッタ、言イシャッタなどといふ。尤、ヲマイリアル等も用ゐるには用ゐるが。

肥前、肥後、筑後

◉肥前、肥後及び筑後でも、其他近邊の國々でも、高來で大村でも、ゾ、カ、ヤラン、ヤラのかはりに、イラォー(Irô) 又はヤラォー(Yarô)を用ゐる。例へば、讀ムイラォー、參ッタラォーなどは、卽ち、參ルカ、——ゾ、——ヤラ、——ヤランである。著作家であり和歌の作者である西行が、戯れに、この國だけの語で作つた短歌がある。

これはかういふのである。

ヤバォーメ(Yabŏme)ガ、イカイテ　ヲソー　サクイラォー
　マッサイムカイ、ファラア　キタトガ

その意味は【以下原文も日本語】

藪梅が如何でか遲う咲くぞ
　實にも早や春は來たと申す

◉又、女達、又は女と話をする男達は、感動詞のヨ、ヨノ、ゾのかはりに、バヲを用ゐる。例へば、參ルバヲ、書イタバヲ、書カォーバヲ、等。

（以下一七〇丁表）

◉又、動詞に助辭サシェメシ、シェメシを附け加へる。これは、ラレと同程度の敬意を有し、都では、サシェ・シ、シェマシと用ゐられるものである。例へば上ゲサシェメシェ、讀マシメス、習ワシメッタのやうに。

◉又、上ゲヨ、見ヨなどの如くヨで終る命令形のヨをロに變ずる。例へば、見ロ、爲ロ、上ゲロ、着ロ、浴ビロなど。

◉肥前でも、又此の下の大部分でも、A又はOの次のYは、その發音に甚悪い一種の響を伴ひ、Eに變ずる。例へば、シェカイ（世界）をシェカエ、好イをヨエ、甘イをアマエ、大事をグエジ、タイシェツ（大切）をタエシェツ、フィロイ（廣い）をフォロエ【フィロエの誤であらう】、黒イをクロエといふなど。

◉Ai、Ei、Ii、Oi、Viに終る形容詞は、現在形のIをカに變ずる。例へば、甘カ、繁カ、新シカ、好カ、黒カ、稀カ、古カなど。

◉猶、他の諸國と同じく、多くの異風な語があるが、それ等は、前揭の短歌に見られる通り多數であるから――かの短歌の殆どすべてが異風な語である――こゝに擧げ盡すことは出來ない。

筑前、博多

◉博多のものは一種の非常な訛があつて、流音（liquido）のクヮ、グヮを悉くパ、バに變じ、パをすべてクヮに變ずるので世に聞えてゐる。過分、鑵子、觀念、菓子、菓子盆等をパブン、パンス、パンネン、パシ、パシボン等と云ひ、シャオーグヮチ（正月）をシャオーバチなどと云ひ、ケンクヮ（喧嘩）のかはりにケンパ（Quenpa）など云ひ、パーデレ（Padre）、パスコア（Pascoa）、パウロ（Paulo）をクヮテレ、クヮスコア、クヮウロといふ。

◉下の諸地方一般に關する追記

◉この下の九箇國全體に於て、すばつた（subatte）ô【合音のオー】は、長いu音【ウの長音】にかはる。例へ

ば、イッショー（一升）、ソー（添ふ）、ケォー（queô 今日）等を、イッシュー、スー、キュー等といふ。

◎或地方では、ツ【ツーの誤か】がトーに變ずる。例へば、マヲーシツージェズ（申し通ぜず）をマヲーシトージェズといふ。又反對にトーがツーに變ずる。例へばトーザヱモン（藤左衛門）をツーザヱモン、トーダイ（燈臺）をツーダイといふなど。

◎移動を示すイェ【方向を示す助詞「へ」】の代りに、ニ、ノヤヲーニ、ノゴトク、サマイニ、サナなどを用ゐる。京へ、筑紫に、坂東さ（キャウイェ、ツクシニ、バンドウサ）といふ諺は、そこから出來たのである。

◎可能法に、ラヲー、ツラヲー、ヅラヲーを用ゐる。之を都ではモノヂャ、ラヲーズ、モノヂャック、モノヂャアルなど云ひ、又文章語ではラン、ツラン、ズランといふ事は、動詞の活用のところで、可能法及び直接法の條下に述べた通りである。

◎アンガイ、コンガイ、アンガイナ、コンガイナ、アンガイニ、コンガイニ等のやうな異風な語が多い。

此の外にもこの文典には諸所に方言記事が散見して居り、九州に關して全然重複するものを除き彼此相補ふ可きもの[18]を拾ふと次の樣である。

◎中国、豊後、博多その他の下の地方では、打消の上ゲザル、上ゲザッタ、上ゲザッテゴザル、上ゲザッテゴザック、上ゲザッタレバ、上ゲザックレドモ、上ゲズシテ等が盛に用ゐられる（二五丁裏）。

◎下のある地方では、文語の未来の上ゲウジ、讀マジ、習ワジを用ゐるが、これは下品な言ひ方である（下略）。

(二六丁表)
◎この上ゲジの形は、他の二種の活用では讀マジ、習ワジ、思ワジなどゝなるが、下のある地方では口語に用ゐられる。否定の現在形からはヌをジに變へてつくる。例へば、上ゲヌ、上ゲジ、讀マヌ、讀マジ、習ワヌ、習ワジなど。」(四三丁表)

◎ノヤォーニ、ノゴトクはある地方でイェの代りに移動の方向を示して用ゐられる。例へば、都ノヤォーニ上ル、關東ノ如ク下ルなど。併し野卑な下級な言ひ方である。(一二三丁裏)

◎ヤラは本來、人があれを何とか呼んでゐるがとか、あなたがあれを何とか呼んでゐられるがとか言ふ爲に、長崎で用ゐられる一種の副詞であつて、ヤによつてその意味があらはれる。その前に一つのトを入れて、先行する固有名詞の後に接するのが規則である。例へば、長崎トヤラニ着イタなど。格を示す助辭は動詞の要求に應じてその後に置かれる。鬼界ヶ島トヤライェ連レテ、云々。若しトを用ゐれば、何ヤラ申サォートト存ジテ、云々。」(一三五丁裏)

因に同じ人が一六二〇年(元和六年)に南支の媽港なる耶蘇會學林で出版した同じく葡文「日本小文典」三卷は一八二五年(文政八年)巴里で佛譯されたが、この方は何れにも方言記事は無いのである。

長崎耶蘇會學林で慶長八年に本篇(三三〇丁)を翌年その補遺(三三一―四〇二丁)を出した四折版「日葡辭書」(19)(Vocabulario da lingoa de Iapam)は、ルドリギス始め多くの耶蘇會士の協力になるものと考へられるが、所收約三萬の和漢雅俗の語彙の中で地方的方言として「上」と註されるもの約百五十、「下」と註されるもの約三百が算へら

れる。[20] 語彙に關しては漫に局部的特殊相を限定出來ないのではあるが、前記長崎版『日本文典』の音聲・語法の記述と相待つて文獻學上の價値は勿論充分認められる可きであつて、

ヲロ　副詞。惡く、不充分に。例　ヲロヨイコト　大してよくもなきこと。下の語。

ホゲ・ホグル・ホゲタ　穴あく。下の語。　同前　老木など、うつろとなる。

などは今日の方言學徒に於ても水準的勞作の結果とされようが、『日本風土記』卷之四の語彙と彼此對照する時一段の興味が湧いて來るのである。『日葡辭書』は以後次の二箇國語に譯出される程の生命を有した。

一六三〇年(寛永七年)にトマス　ピンピス(Tomás Pinpin)等に由つてマニラから出版された『日西辭書』[21](Vocabulario de Japon)六七百頁に於ては、日本語の羅馬字綴方は『日葡辭書』と同じ組織に從つてある。この西譯マニラ版から抽出された四百語不足はその儘一七三八年(元文三年)にメヒコで西班牙人メルチオル　オヤングレス(Melchor Oyanguren)(一六八八生 一七四七歿)が著した西文の『日本文典』[22](Arte de la lengua Japona)四卷の第四卷第八章に附錄されてあり、「上」「下」の別あるものは矢張註してある上に、この文典は他に諸所に方言記述が散見するし、その序に於て Xino と Cami との語が見えるのである。一八六二年(文久二年)には佛人レオン　パジエス(Léon Pagés)に由つて巴里で『日佛辭書』[23](Dictionnaire japonais-français)本文九三三頁が世に出たが、これは『日葡辭書』及び『日西辭書』を基として造つたものであつて、日本語は凡て佛蘭西語流に改められて了つてある代りに一々後へ發音通に片假名が附してあり、Cami と Chimo との註も忠實に佛譯されて附してある。

因に一五九五年(文祿四年)天草耶蘇會學林出版の『羅葡日對譯辭書』及びこの葡萄牙語の部分を除いて一八七〇年巴里に

Societatis Scientiarum Upsaliensis) の第五卷(一七九二年寛政四年刊) へ拉丁文で「日本語解説」[31] (Observationes in Linguam Japonicam) (二五八—七三頁、四折版) を發表したが、是は日本語の音聲と語法とを略述したのであつて前述の『紀行』第三卷所收の「日本語」語彙と彼此相補ふ可きものなのである。「日本語解説」が『紀行』の中へ譯出されたものが獨譯二卷本[32] (一七九二—四年伯林刊) に現れ、更に語彙と握れ合はされたものが佛譯二卷本[33]及び四卷本(一七九六年巴里刊) に見られる。トウーヌベリが短期間に觀察採錄した上記の日本語資料には當時の長崎方言要素が豐富に混入して居り、形容詞「か」語尾は勿論だが此の頃としては最早九州方言の特徴として特に動詞二段活用が語彙の方に於てさへ著しく眼を惹くのである。

一八四八年嘉永元年秋に北日本を經て長崎に來り翌年春へ掛けて該地に滯在した北米合衆國の冒險兒ラナルド マクドナルド(Ranald MacDonald) (一八二四—一八九四年)が採錄五百五十餘語へ時に滑稽なる感違ひの英譯を附した原稿は[34]、彼の遺傳「日本冒險談」(Japan, Story of Adventure) へ後人の傳記を附して一九二三年大正十二に東部華盛頓州立歷史協會から豫約出版された菊判三百餘頁の「附錄」第三(二八七—三〇一頁)に於てABC順英日對譯に整理されてあるが、この資料では形容詞や動詞の活用語尾は今更珍らしくないとしても、散見するF音などは當時としては最早稀々に看過出來ないと思ふ。

長崎出島最後の商館長ヤヌ ヘンドリク ドンケル クルチウス (Jan Hendrik Donker Curtius) ([illegible]) が一八五五年安政二年に物した稿本「日本文法試論」[35] (Proeve eener Japansche Spraakkunst) には(三一一頁)形容詞「か」語尾十數箇が記錄されてあり、日本へは來なかつたがドンケル クルチウスの稿本を共稿增補した獨逸の東洋學者ヨー

ハヌ ヨーゼッ ホッマヌ（Johann Joseph Hoffmann）（一八〇五—七八年）の蘭文同名書(36)（一八五七年安政四年レイドヌ刊）には（三四—六頁）同語尾が散見する外に三四頁の脚註に、

「カ」語尾が多分長崎方言特有なりや、而して誤謬なりや否は、日本人に由つて決定される可きである。

と見え、此の著作の佛譯本(37) Essai de grammaire japonaise（一八六一年文久元年巴里刊）には（六〇—一頁）譯者レオン パジエスが「此の形は辭書に無し」と註してゐる。更にホッマヌ自身が日本の方言記述を諸所に挿入して一八六七年慶應三年に、自序附を翌年明治元年にレイドヌで蘭英文同時に出版した『日本文典』に於ては、蘭文版(38) Japansche Spraakleer もそしてこれは一八七六年明治九年に再版を出した英文版(39) A Japanese Grammar も該問題は日本人に由つて口づから肯定された旨（蘭英共一〇六頁脚註）を述べてゐる。明治の文典は獨譯(40) Japanische Sprachlehre（一八七七年レイドヌ刊）されてゐるのである。

3　日　本

古代に於ては既に『風土記』逸文に幾多各地の土語が見える中に、吾人の記錄す可きものとしては、

筑後國　生葉郡　俗語云酒盞爲宇枳。（釋日本紀十）
肥後國　爾　倍　俗見多物即云爾陪左爾。（釋日本紀十六）
日向國　堪生村　俗語謂栗爲區兒。（塵袋二・塵添壒囊抄九）
大隅國　串卜鄉　髮梳者。隼人俗語久四良。（萬葉集註釋三・詞林采葉抄七）

必志里　　海中之洲。隼人俗語云₂必志₁。（萬葉集註釋七 詞林採葉抄七）

壹岐國　鯨伏郷　　俗云レ鯨爲₂伊佐₁。（萬葉集註釋二 詞林采葉抄四）

なる資料が拾へる。(41) 而して是等の地名傳說中には『日本書紀』と關係を有するものがあり、即ち筑後のものは卷第七景行天皇紀十八年八月の條に見える

昔筑紫俗號レ盞曰₂浮羽₁。

なる記述と對比す可きであり、肥後のものは諸所に見える「甚」「多」「甚多」「富饒」等の文字を是が爲に舊訓では「ニヘサ」と讀ましてゐた位である。

中世に於ては九州は此の方面の記錄は皆無であつて、彼の承德頃の明覺が『悉曇要訣』も全然白紙なのである。

近世に入ると金春禪鳳の『毛端私珍抄』第二音曲に、

なまる事坂東筑紫などのなまりもおよそ似たる物也（中略）、犬ないぬと云は坂東筑紫なまり也

云々とあるアクセントの觀察や、三條西實隆が日記の明應五年（一四九六）正月九日の條には「宗祇談、京へ、ツクシニ、坂東サ」と云ふテニヲハの比較が記されてあり、此の助辭比較の俚諺は當時人々の口に上つてゐたと見えて天正年間の策彥が『蠡測集』、笑雲淸三が、『四海入海』、戶田茂睡が『梨本集』(なしのもと) 卷三下やさては長崎版『日本文典』にも一箇所程引用されてあるのである。

慶安三年（一六五〇）の奧書ある安原貞室の『片言』卷三「人倫幷人名の部」に錄される豐後方言や此の書物の續編たる著者不明の零本『浮世鏡』第三「鳥之部」條下の西國語一箇、さては薩摩侍醫なる曾槃が元祿年間の『日州船漂落紀事』

中に註されたる鹿兒島方言等は、時代からして未だ粗略に出來ないと思ふが、十八世紀に入つてからの語彙記錄は少い乍らも可なり賑かである。

新井白石の「東雅」（享保二年一七一七）はその總論の所に

そのヨといふはまた詞ノ助を得てヨシといひしに、其詞ノ助亦轉じて今の如きは、中土東西南北の方言によりて、ヨシといひ、ヨキといひ、ヨカといひ、ヨクといひ、またヨフなどもいふ

とあるのも、卷之一に「然るに今も筑紫人は原(ハル)をいひて、ハルといふ也」などの筆錄も、その銳敏博識が彼に取つては鬱陶たる西國語にあつても滲み出てゐる實證と謂へよう。

荻生徂徠の「南留別志」（元文元年一七三六）や篠崎東海等の「可成三註(べくなるさんちゅう)」（同年）卷之三には同じ筑紫の語彙一二が論はれてゐるに過ぎないが、小野高尙の「夏山雜談」（寛保元年一七四一）では卷之三・四・五に數箇處の西國語が說明されてある上に、その卷之五には「西國邊土には古き詞遺れり」なる一項さへあつて

畿内及繁花の地は、萬にはやりごと多くて、詞、風俗も、次第にうつりかはるなり。西國邊中にも、薩摩國、肥後國球磨の邊などの人の言語は、上方の人のきゝては、耳などろかすことのみ多けれども、多くは、うつぼ、竹取、源氏物語、清女枕草紙、四の鏡、榮花、今昔、大鏡、增鏡、大和物語等にある詞なり。彼所は五百年來うごかぬ地にて、他國の人も多くいりこまぬ所なれば、古きことば猶のこりたり。

と書いてゐるし、多田義俊は「南嶺子」（寛延三年一七五〇）卷之三一「方語鄕談ノ事」に佐賀方言を、「南嶺遺稿」（寶曆七年一七五七）卷之一「若ゝ之字」の條に阿蘇言葉を何れも一箇宛錄して居る、

越谷吾山の『諸國方言物類稱呼』全五巻（安永四年一七七五初刷刊）所收語彙約三千九百に於て、西國一六〇（内に「おろの島」三）・西土一・西海二・九州四五（内に九國一）・筑紫四三（内につくし六）、薩摩四九（外に薩州六）・肥前二六・肥後十一（外に肥州九）・筑前十二（筑後無し）・豊前十一・豊後九（外に豊州九）・日向四・對馬四（壹岐無し）・大隅二、長崎三五（内に丸山一）・唐津一七・佐賀一〇・鍋島・島原・平戸各一（以上肥前）・久留米三（筑後・指宿一（薩摩）、總計四百七十餘箇が拾はれ、(註七)音聲や語法方面の不備を除けば語彙の特殊性は今日でも可なり考慮參照す可き物が多い樣である。本書の影響は頗る大であつて、『嬉遊笑覧』の如き隨筆、『俚言集覧』を始とする辭書類、殊に櫻川權太夫の『方言達用抄』や一茶の『方言雜集』の如き他地方の方言書、更には十返舍一九の作品に現れる西國語は本書から採用したと考へられる物が多々存する。因に本書の序文や卷四「梯はしご」條下の記述に即する限り吾山は方言區劃では東西二大對立のみを認めて筑紫は獨立させて居ないのである。

古川古松軒は『西遊雜記』（天明三年一七八三）卷之五に

人にもの言かくる時に、上方筋・中國・西國は「アイ」とも「ヘイ」ともいふが、肥後は貴賤共に「ナヒ〳〵」と答へる事にて

と記し、卷之七には、

すべて九州の方言には、「何れの方へ行きし」といふ事を「何れのやうへ行」といふなり。方と樣とを取違へし言葉なり。

と云ふ樣な問題を提供してゐるが、吉田重房は『筑紫紀行』（享和二年一八〇二稿）卷六で長崎方言語彙二十餘箇を平凡に採集してゐるに過ぎない。山宮仲宣は『東牖子』（享和三年一八〇三）卷之五でアクセントは「西國は去聲にして」畿内や東國とは異り即ち方言三大區劃說を仄かして居る樣だが、又同じ卷に於て

あるなさると云、アカサタの横訛にて、今猶筑紫の俗、歩行なさるくといへり

と云ふ意見を述べてゐるし、更に『愚雜俎』後集(天保四年一八三三)巻之一「和訓の辨」では「津輕と長崎とは言語少し通じがたし」などゝ記してゐる。百井塘雨は『笈埃隨筆』(文化元年一八〇四序)巻之三「西行塚」の條で、

ヲロフルは少しふるなり。西州の方言なり。

と註し、巻之五「川鹿」の項では日州方言「クウツ」(石龜)を指摘して居る。

本居宣長が『玉勝間』(寛政五年一七九三—文化七年一八一〇稿)七の巻「ゐなかに古への雅言ののこれる事」に於て、

近き頃、肥後ノ國人のきたるが、云ふことを聞けば、世に見える聞えるなど云ふたぐひを、見ゆる聞ゆるなどゝ云ふなる。こは今の世には絶えて聞えぬ、雅びたることばづかひなるを、其國にては、なべて斯く云ふにやと問ひければ、ひたぶるの賤山がつは皆、見ゆる、きこゆる、さゆる、たゆる、などやうに云ふを、少し言葉をもつくろふ程の者は、多くは見える、聞える、とやうに云ふなり、とぞ語りける。

と書き殘して呉れたのは仲々得難い文獻であるが、同箇處に續いて「ひきかへると云ふ物を、たんがくと云ふなるは」云々は同時代の隨筆類に幾多類似の筆錄が見當るから左迄珍重する程の事も無からう。即ち小野蘭山の『本草綱目啓蒙』四十八巻(文化三年一八〇六初刊)は暫らく措いても、橘泰の『芝屋隨筆』(同年)巻之一には肥後と西國の方言一箇宛、喜多村節信の『瓦礫雜考』(文化十四年一八一七)巻之二「薦の子」には筑後方言を『筠庭雜考』(天保十四年序)巻之三「履の塡」には九州語を一箇宛、荒木田久老が『信濃漫錄』(文政四年一八二一)の「阿由　志田」には西國の「あやす・あえる」(落す・落ちる)を、瀧澤馬琴が『兎園小說別集』(文政八年上巻「東廧」には筑前方言を、高田與清が

『松屋叢考』（文政九年）の「三樹考」には九州地方の植物語彙を數箇記載して居る有様だ。

然るに佐藤成裕が『中凌漫録』（文政九年）巻之一・十四・十五には單語ならぬ鹿兒島や長崎の言葉が批評され、殊に富士谷御杖が『北邊隨筆』（文政十年 巻之一に於て『古事記』神武の巻に見える「阿々志夜 胡志夜」に關して、

おのれらが本藩にて、筑後國 肥河、あつしよ、こつしよとつれいふ詞あり。此詞は、あら笑止やなどいふべからん時にいふよしなれば、いとよくこゝにかなひて聞ゆといへり。神武天皇、もと筑紫よりおこらせたまひしかば、筑紫の方言は、かならずふる言の傳はりたるべければ、うたがひなく、これなるべしとぞおぼゆる。

として居り、巻之三「音の存亡」の條には、

筑紫人は、よく口にわけて、治はちもじの濁れる、次はしもじの濁れるなりと、よく聞ゆるは、げに筑紫は、みかどのもとつ御國なるしるしなるべし。

と述べてゐるのは、稍々言ひ過しの感無きにしも非ずだが此の方面では出色の文字と許し得よう。

『北窻瑣談』（文政十二年）巻之四に橘南溪が肥後方言を、『茅窓漫録』（天保四年一八三三）下巻「天降二異物一、并月桂」に茅原定が西國訛を『柳亭記』巻之上「野郎」に柳亭種彦が薩摩語を一箇宛、伊勢貞丈が『貞丈雜記』（同十四年）巻之六や『安齋隨筆』巻之三・二十四、橘守部が『俗語考』（同十二年序）で數箇宛を筆に上したのは最早物足らないのであるが、『世事百談』（同十四年）巻之二「方言」條下で山崎美成が筑紫の助語「ばつてん」に注目して、

ばとてといふ詞の國のなまりにてばッてんとなるなり。

と素直に解釋したのなどは是非記憶して置かなければなるまい。

伴信友が『比古婆衣』（弘化四年一八四七）巻之二「腹赤(はらか)」に長々と論ずる魚名は專古代文献に關する精緻該博な考證であるから、中島廣足が『橿のしつ枝』（嘉永六年一八五三）の上巻「にしの國のうた」中の割註に於て、

神武紀の御歌に、エ、シヤコシヤ、ア、シヤコシヤ、とあるは、今筑紫國柳河あたりにてアツショ　コツショといふと同意にて、これ古言の遺れるなるべしといふこと、北邊隨筆に見えたり。此詞、わが肥後にては、アツコリショ、エツコリショといひて、あざわらふことばなり。長崎にては、ア、ショクショ、エ、ショク　コといへり。

と書いたのも勿論輕視し難いけれども、後者が同書下巻の「神代」で豊後や肥後の地名や「橿園隨筆」（嘉永七年）上巻「ねことり」で西國語一つ位の記錄は、菅茶山の『筆のすさび』（安政四年一八五七）巻之四「薩州風土」で九州語一箇や西田直養（元治二年一八六五歿）の「篠舎漫筆」巻之一及び八に散見する小倉方言數箇などと共に、「倭訓栞」後編十八巻（明治二十年出版、岐阜）に點在する西國・九州・筑紫の地方語位の意義しか有しないであらう。

所で以上の様な隨筆や辭書と異つて純然たる幕末の方言書が九州に關して今迄の所二箇報告されて居る。

著者年時共不明の「筑紫方言(つくしことば)」(43)は半紙半折の袋綴表紙共十八丁の小冊子であつて幕末も可なり新しい時代の物らしいが、約百七十語句を載せ詳註を施してある。特に長崎と云ふ語が多く見られ二十箇程算へられる。二段活用動詞を十六箇並べた次へ「玉勝間」前掲記事を引用してゐる様な所は兎も角、

奢　おごる　鉢　はぢ
興　おごる　耻　はぢ

なる語例を「奢興鉢耻」の順序で四行並にした次へ、

斯やうに清濁のたかふ言すくなからすまたおごるといへるなともごもごたごと輕く濁るべきをおごるとおもくいみ濁りていふ（中略）すべて五音五十字の中にさ行た行は行のかなはもとより輕くは濁りがたくあ行な行ま行や行ら行わ行のかなは清音のかなにておもくも輕くも濁るべきやうなしひとりかきくけこのかなはかろくもおもくも自在に濁べきかなゝるをむさしにはおもくのみ濁りいへり

云々とあるのは文意稍々不明瞭ではあるが、江戸の式亭三馬が『潮來婦誌』後編や『浮世風呂』前編の何れも凡例に見える所謂「内圓」(註2)及び東北の氏家閑太夫が『莊内方音攷』に於ける所謂「中濁」と相應じて、音聲學上所謂「半有聲音」又は少くとも是に類似せる音聲現象の指摘と考へられ、可なり重要な課題であると思ふ。

肥後は隈府町の菊池神社宮司なる長田穗積（舊稱永田直行）（文化九年一八一二—明治八年一八七五）が四五十歳に掛けて物した『肥後諸國考』(註3)に今日その一部なる『菊池俗言考』しか殘つてゐないが、是は美濃判袋綴の三冊から成り、嘉永七年一八五四六月の序がある。「い—む」六十丁六百二十四言、「う—す」五十七丁五百三十五言が「いろは」順に古書を引用して詳說されてあり、前揭小著では見られない「ばい」「たい」「くさいなァ」の如き助辭も扱はれてあつて、所論は兎も角九州方言本邦舊幕時代資料では最大規模な著述であるが、雅言が多い爲に方言學的價値は案外少い。

註

1 稻葉若吉博士本を「方言」第二卷第九號へ伊波普猷氏が覆刊。

2 『說郛』續編卷第十一所收の本資料は『國語と國文學』第十卷第一號へ秋山謙藏氏が「明代に於ける支那人の日本語研究」の中に東洋文庫本を覆刻。

3 寫本は諸所にある。今書同好會が内閣文庫の明版秘本を參照して大正四年七月に謄寫版複刻刊行。

4　『方言』第二卷第十一號へ抄出。

5　東條操氏『南島方言資料』には内閣文庫本を寫眞にして挿入。

6　12　伊波普猷氏「語音翻譯釋義」（『金澤博士還暦記念東洋語學の研究』）三五四—五頁。

7　小倉進平博士『朝鮮語學史』一六五頁には寫眞がある。

8　同博士『國語及朝鮮語發音概説』六〇頁、同『南部朝鮮の方言』一九一頁。

9　同『朝鮮語學史』一七五頁の寫眞。

10　南島談話會が大正十四年校訂刊行。

11　伊波普猷氏『古琉球』再版以後所收。

13　14　同氏「語音翻譯釋義」（既出）三五八—九頁。

15　刊本は英國オクスフアドのボドレイ文庫とクローフアド伯爵家とに一部宛存するのみ。

16　新村出博士『東方言語史叢考』二七〇—一頁には一六九丁表と一七〇丁裏との二頁分のロートグラフの寫眞が挿入されてあるが、生憎九州方言の所が全然見られない。東洋文庫所藏ロートグラフの寫眞から撮つた本稿挿入二頁分は彼此相補ふ可きものである。

17　『民族』第貳卷第壹號の橋本進吉博士が「三百餘年前の日本の方言に關する西人の研究一一三—五頁の譯文に些少の補正を加へて轉載したのである。

18　土井忠生氏の教示譯文に由る。尙同氏が『方言』第二卷第九號の「ロドリーゲスの日本方言研究」參照。

19　刊本はボドレイ文庫と巴里國民文庫と葡國エヴラ公立文庫とに一部宛存するのみ。

20　『方言』第一巻第二號・第二巻第二・五號・第三巻第五號の近藤國臣氏が「長崎版日葡辭書にあらはれたる方言資料」。

21—25　27—29　32　33　36—40　刋本は日本にもある。

22　新村博士が『南蠻廣記』の「メキシコ菩版の日本文典」、伊藤長藏氏が『書物の趣味』第五册の育文參照。

26　『九大國文學』第三號の土井忠生氏が「吉利支丹懺悔錄の方言」。

30　東條操氏『南島方言資料』に石版覆刻してある。

31　『方言』第三巻第九號へ凸版覆刻。

34　『方言』第二巻第五號へ覆刻。因に該原稿は圖書館で最近紛失したと云ふ。

35　和蘭レイドヌ大學圖書館所藏。ヨハネス　ラーデル（Johannes Rahder）氏の教示資料に由る。

38—40　出版年次は龜田次郎氏が『書物の趣味』第一册の論文に由る。

41　『日本古典全集』の『改訂増補採輯諸國風土記』を基として出典に當り、私見を以て補正整理した。

42　『文學研究』第一輯の「『物類稱呼』西國方言索引」を吉澤義則博士の『校本物類稱呼諸國方言索引』と對照して改めた數字である。

43　『方言』第一巻第三號に覆刻。但し誤植が多い。

44　『浮世風呂』前編巻之上の西國者の言葉の「今一時（まいつとき）過（すぐ）ると」の振假名「く」に附した細かい用意が原本では分る。

45　春陽堂『日本小說文庫』の長田幹彥氏が「神風連」二頁へ登錄してある。

三　文學

文學資料中に散在する筑紫方言、及び九州言葉もて綴られた文學資料の展開を次に行ふのである。無意識的有意識的に筆録に上された寡少極まる資料と雖も殘らず配列する餘裕は無いのであるが、單なる書名の指摘だけでは滿足出來ないものは煩を厭はず原文を引用して置いた。

「萬葉集」全二十卷凡四千五百首中で九州に就て詠まれた歌は二百七八十首と算へられるが、大部分は當時の中央都會人の作であるし、言葉遣の上では土着人の手になるものと雖も地方的差異は見られないのである。是は夙に賀茂眞淵がその「續萬葉論」卷第二十の「東歌」の條に於て、

萬葉考にこれ及うたひ物の中の東歌也さて契沖が說を記せりいとうがてり此國は西より開て西の國は歌にも京に異ならず東は遲く開けてしかも歌詞もことなれば萬葉に東歌とて別にせしもの也

云々として契沖の說を引き、更に自說として、

抑て神武天皇筑紫より起り給ひて西こそ五代に亘らとすれ東を先とする證なし（中略）つくしの歌と云なし風俗の歌舞を奏すといふは大隅さつまの隼人朝廷に參りて奉庭上舞より右いふ西の歌あげざるに元來の王都なれば京に及ばざるにて知るべし

と書いてある上に、更に同じく「古今和歌集打聽」卷第二十の「東歌」の條では、

皇國の東國ぞの日御國は西よりひらけつれば西の國々の歌も宮ぶりに異ならずひがしの國々はおそく從服ひたてまつりて人の心あらくたれば歌の詞も異ざまなるをもて萬葉集にあづま歌とて別に上たるなり

と記して居るし、更には中島廣足がその「樫のしつ枝」上卷「にしの國のうた」に於て、

東歌のさばかり聞にくみたるに、西の方は國島までもかくみやびたりしは、東海の道の遠くにて、神武天皇の昔より國はじめた

まひし故なるべし。(中略)又太宰府には常に都の官人多く下られたれば、それになれて、自ら詞遣もよかりしにやと論じてゐる通り、「筑紫歌」なるものは格別に設ける必要が無かつたのである。從つて吾人の對象になるものは、將來古代假字遣研究進歩の結果は知らず、次の二首位しか提供出來ない有樣であつて、是等は何れも古くから行はれてゐた地方的民謠と考へられるのである。

一は卷第三なる「仙柘枝歌」三首の第一、

霰零吉志美我高嶺乎險跡草取可奈和妹手乎取

であつて、是は、

あられふり　きしみがたけを　さがしみと　くさとりかなわ　いもがてをとる

と詠まれ得る限り、言葉付にある特色が出來てはゐるし、『肥前風土記』杵島郡の頭註に見える類歌よりも舊さうであり而も『古事記』下卷に存する「倉椅山」二首の始めのものゝ原歌らしく、即ち萬葉以前の筑紫地方歌が集に於てその編入場所を誤られたものと解する時、捨て難い資料となるのである。(1)

今一は卷第十六なる「筑前國志賀白水郎歌」十首の第六、

荒雄良者妻子之產業乎婆不念呂年之八歲乎騰來不座

であつて、是は舊訓通り、

あらをらは　めこのわざをば　おもはずろ　としのやとせを　まてどきまさず

と讀んでも、第三句の「呂」なる助辭に關して、是は其時代の東國防人が東國の「ろ」を傳へたと見てよいか、又は

九州にも亦武場合に「ろ」を使つたものかと云ふ論題が提出されてゐるのである。(2)

中世はそれこそ絶無とも言へようが、それでも所謂『承徳本古謠集』が含む二十一曲二十八首の新資料の中には西國に關係して只一首「肥後風俗」があり、即ち挿入寫眞は

しど打たな、たりたな、しどうちらゝ、しどうちら、たりたな、しどうちらゝ、とうあり、たりたな、な
とうとらゝ、

と讀むのであるが、「しど」は「しだら」の訛であると言はれるのである。(3) 近世に入つては先づ『全浙兵制』附錄の『日本風土記』卷之五所收の十數種の山歌（俗謠の意）の次に潛む「憶中華調」と題する拙劣な直譯體の琴譜（琴歌）一首を無視してはならない。是は部分的讀解に昔からも數次試みられてゐるのであるが、(4) 挿入寫眞に於て本文は釋音に由つて訂正されるのが此の場合でも穩當な樣であり、是を卷之三の「字書」(5)や和歌及び前項にも抄出した卷之四の語例から得られる讀樣を該當させ、傍ら切意を參照して按讀して見ると、

肥後風俗
之止宇太奈太利太奈之止宇千
良ゝ之止宇千良太利太奈之止
宇千良ゝ止宇安利太利太奈ゝ
止宇止良ゝ

承徳本古謠集

戀しやの中華に　戀の中國　人物利根なよ　着ちゑ物淨い　西湖好か景　青山綠水
遊ぶ上手　見る見事い　心想無憨　海遠い　とものかよの　おんちゃろ　日本中

とでもなる筈であつて、「とものかよの」は詠嘆句だらうが無理な讀解は控へて置いても、「着ちる」や殊に「好か」の語法は近代九州方言最初の文學資料として尊重す可きであらう。寛永年間に遠く南洋へ追放された人達から書き送られた平戸の所謂「じやがたら文」などを想起對比して見れば、益々此の感が深まると思ふ。

今から三百有餘年前筑紫の天地で産まれ育てられた僅少な南蠻文學の用語は文口語共に京都方言を基とした當時の標準語とも云ふ可き性質の物であつて(6)、幾分地下の言語に牽制されはしなかつたかと云ふ疑はあるが(7)、決して丸出しの地方俚語でなかつた事は呉々も承知して居なければならない。方言要素の濃厚に見らる可き口語資料にあつてもこの事實は儼として動かなかつた。天草版『アルヴアレス式拉丁文典』三卷（文祿三年一五九四）を始として、少くとも現存の奇覯文典辭書數種に點在引用されてゐるのみの古逸斷片資料も(8)、天草版『口譯平家物語』(9)（文祿元年）、同『伊曾保物語』(10)（文祿二年）、同『金句集』（文祿二年）もその用語は所謂「日本の言葉」であつて、所謂「國郷談」ではなかつたのである。只一六三二年（寛永九年）羅馬刊行の『懺悔錄』(11)（Niffonno cotobani yô confesion uo mōsu yôdai etc.）は同時代の近畿方言口語資料『おあん物語』と同じく助語「さかい」を使用

琴錄
制琴亦用絲絅取音按古制宮商角徵羽五音
分設五絃無文武二絃其燕足焦尾徽桅皆同
中國手按之法迎撓勾剔蛇指大略無異但譜
曲以秘不傳係本國鄉談俗語非正音也

內閣文庫所藏明版（その一）

内閣文庫所蔵明版（その二）

してゐる程碎けた用語を以てしてゐるが、少くとも編者位には見做される可きコリャゾが如何程關係したかはさて置き、アクセント符號が施してあるし、『日葡辭書』で兎も角「下」の語彙と註してある「調備」(chōbi)(「仕合せ」の意)が混じてゐたりするので、吾人に取つて面白い資料にはなるものゝ、總じて切支丹文學に於ける筑紫言葉なるものは殆ど問題にならなかつたのである。(12)

德川の內國文學は十八世紀中葉を境として上方文學と江戸文學とに兩分されるが、前者に於ては勿論その用語は平安朝以來の傳統に由つて保護された京都語系であつて、九州語は依然として關西の言語に支配されてゐた。(13)

筑紫の地方語彙は井原西鶴の『好色一代男』（天和二年一六八二）卷三「袖の海の肴賣」にも見え

る「たゝ」（女肴賣）が風國撰『泊船集』（元祿十一年一六九八）卷之六や蝶夢撰『去來發句集』（安永三年一七七四）の「秋」にも註されたり、江島其磧が『けいせい色三味線』（元祿十四年）の「湊之卷」第四「詞に角のたゝぬ丸山の口舌（くぜつ）」に見える、

ひとりがいへるは、鶏喰（にはとり）ふて酒なのめば雨降（ふり）に合羽着（かつぱき）てさるくやうなど、いふる詞槇（ことば）に長崎者とおほへたり

と云ふ樣な文字が矢鱈には無いにしても、後世人の眼界からは著しく局部的特殊相が減殺されて來るから以後最早一々指摘する必要はないのである。是は例へば何れも佐賀藩士が口述筆錄になる所の肥前論語又は鍋島論語と呼ばれる『葉隱（はがくれ）』（十八世紀十年代稿）なる修身書の文語に含まるゝ所謂難句(14)に對しても同樣な事が言へるのである。

然るに唯一的と迄は強く主張出來ないにしても、若し是が九州方言の根幹的部分を爲す標識的助辭である場合には、吾人は丹念にその年代的記錄を考慮する必要があるのであつて、例へば巢林子が『大職冠』（正德三年一七一三）第二に見える唐音

ばあゝ、君けんくるけん、くるめあめいたかりんかんきう

が其磧の『國姓爺明朝大平記』（享保二年一七一七）の二之卷第一「旅人の仕合吹付けた浦の唐猫」にも模倣採用され、是は「君けん來るけん久留米飴板」と通はせて「けん」（から、故に）に解す可きであると云ふ說や、澤露川に隨伴した燕說が筆錄になる「西國曲（ぶり）」（享保二年）卷之四勞頭の筑前國曲に於ける

されぱくさ　嫉（「コソト云事也）の華咲く　博多練　　黑崎

などは大に珍重しなければならないのである。

實に土佐少掾正勝が古淨瑠璃『博多露左衛門色傳授』（寶永五年一七〇八）第一にある

　諸國なめぐり色里に、あそびひなびし國詞

の赤裸々なる姿態は、巣林子が『博多小女郎浪枕』（享保三年一七一八）に於て漸くその一部を僅かながら表現したのであるが、吾人はこの上卷二箇所のみに躍動する毛剃九右衛門の長崎訛りが非九州人の耳と筆とに由るものとしては隨分現實味を帶びて居る事に注意しなければならない。同じ人の「平家女護島」（享保四年）第二段に三回點綴する千鳥の海女言葉さへ當時流行してゐた出鱈目な所謂唐音の大部分に比する時、その嬌態的薩摩訛りが實に日本文學に於て刻する影の濃さに人々は一驚する筈である。

紀海音が「鎭西八郎唐土船」（享保五年）で四國は高松居住者をして、

　毎日八つの前後湯に入るは、上方者共九州共、飼付がまぎらはし

と言はしめてゐるのは、勿論各自がお國訛り丸出しを遠慮した時の現象であつて、明和九年（一七七二）刊の高山子が「山家鳥虫歌」所收五十首不足では豐後以外は全然失望する吾人も『物類稱呼』（一七七五）では筑紫の方言にてよめる歌、

　櫻ばな　さへてなじかい　散ていろ　おろよか風の　ふいたけいこつ（卷五「わるいといふ事」）

が擧げられてあり、又眞僞は知らず、近衛龍山（天文五年生 慶長十七年歿）が薩摩方言で詠まれた歌として、

　ぬすとでゝ　おらぶにはたと　たまかりて　くわくさつからに　せゝくりそすや（卷一「ぬすびと」）

とあるのは戸田翠香の「鹿兒島ことば」（明治二十四年）にも見える所謂賴山陽（安永九年生 天保三年歿）の作歌と稱される、

　をごじよだち　ちよとでち　みてみやれ　さくらじま　づたんばらから　つきがはつでた

と同巧異曲な代物とはしても、標準語に浸潤される事少き方言の純眞性をよく熟視鑑賞しなければならない。

『和訓栞』の首卷（一七七七）「大綱」〇言語共方俗あるは云々の所に載せられる豐後辭の歌二首、

きのえ見ちえ　きふ見んしひか　くいしいに　二日と見ずは　うどうどうしやう

おれもわりう　おむひはすれど　どうしうろ　つひにあふえじ　しんきなんじやり

も、瀧澤馬琴の遺稿「曲亭雜記」（明治二十一―二年）第一輯上編〇かんかんのう踊唱歌の所で、

わしがおしやんすに手ぬぐひともやつたチウがとらんチウ　いろはかすりかけチウ　やろこたやつたチウが物にならんチウ　いろ事ともしそこなつてヨカタイヨカチウ

なる日向の歌と懸け竝べて見ると九州でも又別種の地方色が浮出して來よう。

蜀山人が『金會木』に記す文化六年（一八〇九）八月四日長崎立山で詠んだ、

此池は　とんくもなかぬ　ばつてんかし　こまか鮒とも　出うきともする

の方は兎も角、

長崎の　山の端に出る　月はよか　こんげん月は　えつとなかばい

わりたちも　みんな出て見ろ　今夜こそ　彦山やまの　月はよかばい

の二首は同じく人口に膾炙されてはゐるが墨付稿本は全然無いのであつて、實は此の點では十七八世紀の人なる森川許六が長崎來遊の砌讀んだと傳へられる、

あまたちの　じゆつたんぼうで　どんくとる　あらよそわしか　おんだいやばい

程の資料價値[16]は認め難い物とされてゐるが、お國訛丸出しの方言歌なるものは九州方面に限らす案外實例が少いので[17]あるから仲々捨てられないのであつて、例へば大谷士由の「美佐古鮓」（文化十三年）に錄されてある俳句

春風や　アマコマ走る　帆かけ船　　和蘭陀人

あまこまとは、あれこれといふ事ぢやといふておこす。

などとは又違つた價値がある筈である。

從つてその紙質や罫付から見て化政以前へは大丈夫行くらしい『柳川方言洹河沙一撮』[18]なる美濃判七紙記載の俳諧連歌五十句は貴重なものとしなければならない。平假名交りの本文には純粹なる柳河方言の根幹的語法が豐富に盛られてあり、片假名で一々傍註が施してある。一部分を抄出すると、

春さむかそりて（イシカレトモ）ちや月は朧たん（助語）
ほそか（微）柳に風のおろふく
若子達わかうさんふうりう（紙鳶）あけていさす（居）のに
毛むしりかふて（除ニ繩ノ毘小刀也）繩をかまたす（セイダス）

此の譯者なる錦悦山には柳蕭大通辭と冠してはあるが勿論匿名であり、且つ人物も不明である。

時勢は既に江戸方言が擡頭してゐたが、噺本も黄表紙も洒落本も中央の作品は西國の「もさ詞」に關して誠に緣遠いものであつた。[19]

江戸の行成山房大公人が『公大無多言』（天明元年一七八一）に出る西國侍は只一回の「關東べい」もて代用されてあるが、

大阪の金太樓が『花街滑稽一文塊』(文化四年一八〇七)には僅かにしろ

よか嫁をもちやつた

今年な砂糖を、ふとか事登せ申す

とあるのは矢張その地理的關係に由るものと言へようか。他の中央洒落本に九州方言あるを聞かぬ。

滑稽本に於て僅少ながら西國語は拾へるもの丶、中央人としては左の七家しか算へられない。勿論大部分は缺點だらけである。(20)

十返舎一九はその作品に使用した方言の中で江戸から東海道中に掛けて京阪のものは眞實の寫生と言へようが、それ以外のものは『物類稱呼』を種にした事が昭和七年秋に本稿執筆者に由つて見露はされた。(21) 實感はあつたらうがその一流の變態的西國語は『東海道中膝栗毛』二編(享和三年一八〇三)巻之上・三編(同四年)巻之上・六編(文化四年一八〇七)上編、『續膝栗毛』初編(同七年)上巻二箇所・二編(同八年)上巻二箇所・同下巻・九編(文政二年一八一九)上冊・同下冊に於て見られ、又合巻本ではあるが『方言修業金草鞋』四編(文化十一年か)、『忠臣狸七役』(文政十一年)にも用ゐられてゐる。

頭陀樂雲水の『奥九旅人井中水』(22)(文化五年)には筑後河下流地方の特徴「ばん」「たん」語尾を以てしてある。

棹歌亭眞樹の『下愚方言鄙通辭』(23)(文化七年)下冊には恐らく架空的なる可き豐後者の言葉が二回見えるのみである。

東里山人の『田舎通言驛路の鈴』(文化八年)は舞臺は九州だが言葉は『關東平』を以てして居り却て面白い。

式亭三馬は所謂典型的西國語たる肥筑地方のものを寫實的に文字に留めた唯一の人であつて、その『戲場粋言幕之外』(文化三年)巻之上、『渾話浮世風呂』前編(同六年)巻之上、『素人狂言紋切形』(同十一年)上編、『有情非情大千世界樂屋

探」（同十四年）初篇卷之上に於て僅少ながら寫されたものは濁點や振假名に至る迄苦心が凝らしてあつて、廣く國語史に取つても無視出來ない材料である。

瀧亭鯉丈の「花暦八笑人」初編（文政三年）と「柳髪新話浮世床」三編（同六年）とに可なり長文もて存在する西國語は、師匠を學んだのであるが、大分缺點がある。

一筆庵可候が「魂膽夢輔譚」二編（弘化二年一八四五）と「勸善懲惡稽古三味線」（同三年）下之卷とに趣向を凝らした西國語は著しく標準語化してゐるが、中國四國筋のものが混線した變態的言語である。

以上の外に九州地方で著された郷土方言文學が些少ながら存する。今は名のみ傳ふる作者年次共不明の「梅ケ枝餅」(24)は太宰府近傍を描いた酒落本であるが、佐賀藩士の蒲原大藏（安政四年一八五七歿）が廿四種の酒落本・滑稽本は何れも純眞なる佐賀方言が會話に用ゐられてあり、その中の『伊勢道中不案內記』(25)三編十二冊は文政年間から三十數年掛つて成つたのであつて最も大冊である。

次に同じく九州で著述され又は關係する抄物類で參考にす可き物がある。

薩摩藩士なる毛利正直（寶曆十一生享和三年歿）の「大石兵六夢物語」（天明四年序）は二三の地方的語彙を除いては文語を以てしてあるから、同じく文語の而も候文を和蘭流羅馬字もて書付けた島津齊彬の『ローマ字日記』（嘉永初年頃）等と共に、吾人の對象にならないし、琉球人の日本語習得用書となつた翁廷棟玉城親方盛林（乾隆三二一七六七—道光二四一八四四）が『大和口上』(26)（文政元—六年）半紙十六丁分には「御座り申す」式の普通語に交つて僅かに「どしこ」（幾何）なる薩摩訛が數箇見えるに過ぎないのである。

福岡藩士なる井土周磐(天明二(一七八二)ー文久二(一八六二))が當時の福岡言葉もて漢籍三種を和げたもので今日殘れる物は、「小學方言講義」(27)(天保八年日附)半紙寫本四冊計一七八丁及び「論語俚講」なる寫本四一丁であつて、方言要素に於て後者は前者に劣るが、前者にあつても「か」語尾其儘の形容詞や「ばってん」助辭などは存しないから、大隅言道の短歌に僅か宛拾へる地方的色彩(28)を今少し濃厚にした「中マッスル」式口語と思へばよい。

明治以後の夥多な文獻に於て(29)、所謂民謡俗謡の結集刊行物は中央たると地方たるとを問はず鹿兒島縣あたりを除いては吾人の興味を滿足させて異れないのであるが、創作類には可なり面白い資料が僅か宛ながら潜んで居り、所謂全集を出した人々に就いて云ふと、坪内逍遙、二葉亭四迷、夏目漱石、德富蘆花、若山牧水、北原白秋、佐々木邦の諸氏は何等かの意味で九州方言を考へさせられた人々である。その他にも大泉黑石、夢野久作、十一谷義三郎、長田幹彦氏等に眞劍な筑紫言葉の苦心があるし、是は文士ではないが鹿兒島の重永義榮氏は古來決して眞の形態を見せなかつた該地方言を寫生して發表された事があつた。

勿論幾多の新聞雑誌類には時々捨て難き片言隻句が出沒する事は言ふ迄も無い上に、中央人士には餘り知られない地方行事の産物があるが、吾人は茲に九州三大郷土方言文學資料として、東北九州の豐後淨瑠璃の殘存、西北九州の博多仁和加の傳統、南九州の肥後狂句の發展を一言して置く必要を感ずる。何れも三百年來の沿革を有し今や民俗學的方法に由らずんば眞相に接しられない物があるが、吾人の研究對象としての方言の結集刊行物は左の通であつて何れも殆ど絶版である。

豐後淨瑠璃は所謂都會藝術たる豐後節とよく混同されるが、此處に謂ふのは古淨瑠璃の方言歌詞であつて、菊池幽

芳氏の『**別府温泉繁昌記**』（明治四十二年）、北原白秋氏の『**季節の窓**』（大正十四年、『白秋全集』第十三巻所收）、宮武省三氏の『**習俗雜記**』（昭和二年）には活字化された採錄がある。

博多仁和加は現在迄に約六百幕の發表があるが元來は粗朴な書帳が其儘脚本となり筋書以外は方言の臺辭は無かつたのである。活字化された單冊刊行物は何れも福岡市内發行だが、編纂者の出生地に由つて方言要素が幾分宛異つてゐる。原田東洲『**博多仁和加**』（明治三十五年）、竹田秋樓『**博多仁和加集**』（大正三年、四年再版）、普啼齋稜天氏『**新作滑稽博多一人仁〇加集**』（同五年初版）、内野環星氏『**博多仁和加大會**』（同五年）、環星・秋樓『**新選博多仁和加**』（同七年、同年再版）、内野環星氏『**新編博多仁和加**』（同十年）、東雲道人氏『**實通入船日龍同盟**』（同十三年）、穗亜誌雨林氏『**新作博多仁和加**』（昭和四年初版）だけは少く共記錄して置かなければならない。尙佐賀や熊本の仁和加は印行されてない。

肥後狂句は元來「品」と「俗」即ち國俳と狂句とを總稱して「肥後俳」とされるもの丶中で後者のみを意味するが、前者には方言は先づ無いと思つてよい。結集刊行物は何れも熊本市内發行だが、狂句に關しては、中村露華氏『**肥後俳句**』（明治三十五年）、中山霞山氏『**肥後狂句集**』（同三十六年）、松本奇妙氏『**肥後狂句狂歌集**』（同四十年）、中山霞山氏『**肥後狂句短評集**』（昭和六年）がある。因に肥後狂句に刺戟されて出來た薩摩狂句は村林孫四郎氏の『**鹿兒島語法**』の初版（明治四十一年）のみにある附錄が最初の印行であり、兩狂句は更に日野丁拗切氏『**日向狂句**』（昭和四年、宮崎市）を産ましめるに至つた。

細かい事を言ふ樣だが、方言繪端書なるものも九州は他地方とは自ら異つた價値が存する筈であつて、是は現在の所では福岡市と鹿兒島市とだけにしか見られないのである、併し九州方言も歌詞會話のみならず地の文迄へも行はれ

た文學は遂に産しないのであつた。

註

1 『能古』（九大法文學部國文學研究室）昭和四年九月號の春日政治氏が「萬葉人の歌へる北九州」。

2 新村出博士『東方言語史叢考』「東國方言沿革考」の三一二―三頁。

3 貴重圖書影本刊行會の佐々木信綱博士が「解説」九―一〇頁。

4 新村博士『南蠻記』及び『續南蠻廣記』の「倭寇時代の俗謠」、「九大國文學」第二號の「九州方言の特異性」（二）。

5 伴信友の『假字の本末』上卷之下に引用轉載されてある。

6 村岡典嗣博士『吉利支丹文學抄』の「序説」六八頁。
橋本進吉博士「文祿元年天草版吉利支丹教義の研究」の「用語について」六六―九三頁。

7 湯澤幸吉郎氏『室町時代の言語研究』で橋本博士が「序」三頁。

8 『九大國文學』第二號六六―七頁、同第三號五六頁。卽ち長崎版『日本文典』の引用文翻刻に見える只二箇の下二段活用形「まらせた」は古形であり從って九州的であると一時唱へられてゐたが、原典調査の結果矢張り標準語通り佐行變格の「まらした」である事が分つたのである。尚『國語・國文』創刊號の新村博士が「吉利支丹文學殘闕」には「日葡辭書」中の引用文抄出があるが、總じて古逸資料も語法は當時の標準語である事が愈々確證される。

9 『教育』（茗溪會）第五百三十九號の湯澤幸吉郎氏が「天草本平家物語の語法」七〇頁、「九大國文學」第二號六七―九頁。

10 新潮社『日本文學講座』第十四卷の春日政治氏が「國語史上の一劃期」七頁（改訂新版第一卷九一頁）、「九大國文學」第二號七〇―一頁。

11 『九大國文學』第二號七二―八頁。同第三號の土井忠生氏が「吉利支丹懺悔錄の方言」。

12 離れ切支丹又は古切支丹或は近頃舊切支丹と呼ばれる一團の宗教文獻に異る注目す可きものがある。

浦川和三郎氏『日本に於ける公教會の復活』前編、同『切支丹の復活』後編。

新村出博士『南蠻廣記』の「攝津高槻在東氏所藏の吉利支丹遺物」（『京都帝國大學文學部考古學研究報告』第七册『吉利支丹遺物の研究』より轉收）。

姉崎正治博士『切支丹の迫害と潛伏』の第七章。

早田大學文學部文學思想研究會『文學思想研究』第一卷で西村眞次氏が「日本に於ける羅馬加特力教徒の秘密なる信仰傳承」。長沼賢海氏『日本宗教史の研究』の十一、十二。

田北耕也氏「舊きりしたんの研究」（れなせんさ會『奈雅瑳奇』第一卷第一册、第二册）。

13 『帝國文學』第拾六卷第四の保科孝一氏が「關東べい」。

安藤正次氏『古代國語の研究』三六—七頁。

吉澤義則博士『國語說鈴』の「東西兩京の言葉戰ひ」、同『國語史概說』の「東西二大方言の競爭」。

14 『鍋島論語葉隱』へ中村郁一氏が「難句略解」として抄出、『方言』第三卷第一號へ轉載。

15 『方言』第二卷第九號へ覆刻。

16 香月薫平の遺稿『長崎古事集覽』なる手寫本に書留められてあるが、此の遺稿の所在目下不明。

17 改造社『短歌講座』第十卷『特殊研究篇』上卷の東條操氏が「方言と和歌」。

18 『方言』第三卷第二號へ覆刻。

19 『東亞之光』第四卷第十二號・第五卷第一號の保科孝一氏が「江戶言葉に就て」、新潮社『日本文學講座』第十・四卷の同氏が

「日本文學の言語學的考察」（改訂新版第四卷）。

吉澤博士「東西兩京の言葉戰ひ」（『國語說鈴』）二四一—二頁。

新潮社『日本文學講座』第九卷の東條操氏が「方言研究と方言文學」（改訂新版第十四卷）。

『國學院雜誌』第三十九卷第一號の尾崎久彌氏が「日本鄕土文學概論」。

20 『文藝春秋』第十年第九號「涼風讀本」の尾崎久彌氏が「九州方言の小說」、『文學研究』第二輯「九州方言の特異性」（三）。

21 『文學研究』第二輯、『土の香』第五周年紀念號（謄寫版）の「吾山と一九との西國語」。

22 『言語』第二輯へ紹介。

23 『方言』第三卷第六號へ紹介。

24 肥前史談會が印行した『伊勢道中不案內記』の「はしがき」一〇頁へ記載、『文學研究』第二輯一二八頁へ轉載。

25 『佐々木信綱博士還曆記念論文集日本文學論纂』に東條操氏の紹介がある。

26 『方言』第三卷第十一號へ覆刻。

27 『文學研究』第四輯に春日政治氏の國語學的研究發表がある。

28 『能古』昭和五年八月號の春日氏が「雲出島還處漫談」で抄出。

29 以下は『文學研究』第三輯の「九州方言の特異性」（四）に詳しい。

四　研究

明治になつて泰西の學問の研究方法が新に日本に輸入されるにつれて方言も從來見られない樣々な分野から云々さ

れる樣になつた。

十年代には今日の專門家から見ては單に歷史的意義しか有しないのではあるが、白野夏雲(文政十年一八生)が「學藝志林」七卷(十三年七月)と八卷(十四年六月)へ「古代地名考」を發表して熊襲を「クマウソ」(熊は偏寄の意)、熊本を「クマアト」(隈跡)、囎唹を「ソウ」(磯濱)、薩摩の薩を「サツ」(乾)であるとする本邦地名蝦夷語解釋論の先端を九州にも觸れてゐるのである。(1)

二十年代には是亦現在の言語學から訂正しなければならないが、「日本亞細亞協會會報」(英文)第十七卷第一部(廿二年四月)に於てバズル　ホール　チエインバリス(Basil Hall Chamberlain)氏は當時新發見の日本耶蘇會刊行書用語の音韻を、限界九州を出でざる南蠻布教士コリャゾと同じく、三百年前にあつても長崎方言のみが有する特質なるかの如き口吻を洩らして、切支丹文學用語九州方言混用說の皮切を勤める地位に坐し、(2)此の態度は更に進んで同じく局部的方言研鑽の結果數年後には遂に琉球語母音過重評價の錯誤を示す同會報論文發表となつたのであつた。(3)

然るに三十年代に入るや、小冊子ながら見解全國に亙る大島正健博士が「音韻漫錄」(卅一年七月)も世に出るし、熊本・宮崎兩縣を除いては九州各縣に相當の印行方言冊子が出揃つて中には今日尙是以上の物は見られない程のものもあり、三十五年四月には國語調査委員會が設置されたのも道理と思はれる。

同會が努力の結晶たる『音韻調査報告書』一冊と『音韻分布圖』廿九枚(卅八年三月)及び『口語法調査報告書』二冊と『口語法分布圖』卅七枚(卅九年十二月)に由つて從來常識的に認められてゐた東日本・西日本の方言境界線は學理的に決定されたが、

玆に『口語法調査報告書』上の「口語法分布圖概觀」の記事中には(六頁)、

八、九州ニハ概シテ古キ形殘リ他ノ地方ニ普ク行ハル、新シキ形ナキ事多シ

九、九州ニ於ケル云ヒ方ノ、東北若ハ東方言語區域ニ於ケル云ヒ方ト、原形ニ近キモノヲ保存スル點ニ於テ相一致スルコトアリ

と云ふ文字が見えて居り、又分布圖中に於ては「口語法分布圖」第二十九圖が九州方言學上最も興味あり記憶す可きものであつて即ち挿入寫眞に由つて其面影が解らう。同會の此の調査は九州だけに關しても熊本や鹿兒島等の縣は報告が密ならず不備缺陷に多いのであるが功績は甚大であつて、同會編纂の「口語法別記」(大正六年四月)にも、書中散見する九州の言語事實は是に基いてゐるのである。

四十年代に入つて行はれた同會の第二回調査(四十一年三月)資料は大正十二年九月の震火で悉皆消失して了つたから、三十年代が産んだ殊に前記分布圖一揃は今や貴重な文獻と謂ふ可きであらう。『日本亞細亞協會會報』第三十八卷(四十四年)第三部には英人ヂオーヂ ベイリ サンサム(George Bailey Sansom)氏が行屆いた「長崎地方方言慣用法手記」(英文)が現れたりして明治は終つた。

大正改元早くも二年と云ふ年には國語調査委員會の廢止さへ行はれる有樣であつて、獨人ヴイルヘルム エル シヴアルツ(Wilhelm E. Schwartz)氏が『日本亞細亞協會會報』第四十三卷(四年)第二部へ日本の方言書を基にして書いた「薩摩方言概觀」(英文)を發表したり、露人イエヴゲニイ ドミトリイエヴイチ ポリヴアノフ(Evgenij Dmitrievič Polivanov)氏が露都で「日本方言の心理音聲的觀察」(七)(露文)第一冊として發表(六年一九一七)した本格的な長崎方言研究などはあつたが、歐洲戰爭が人心を左右した大正期は總じて方言學は雌伏期であつた。

昭和となつて文運の隆昌は狭く見ても從來頗る振はなかつた言語學・國語學の名著の刊行が頻出し、九州地名解釋に南洋語を以てする樣な試さへ提出され出したが(八)、茲に截然として第二次方言熱の勃興を見るに至り、東條操氏の二

十年間の準備期を經て成れる『大日本方言地圖』及びその說明書たる『國語の方言區劃』(二年三月初版)が上梓された。凡そ學術上の著作がその質に由つて評價されるものとする限り、此の小著は吾人に取つて樣々な視點から論究されなければな

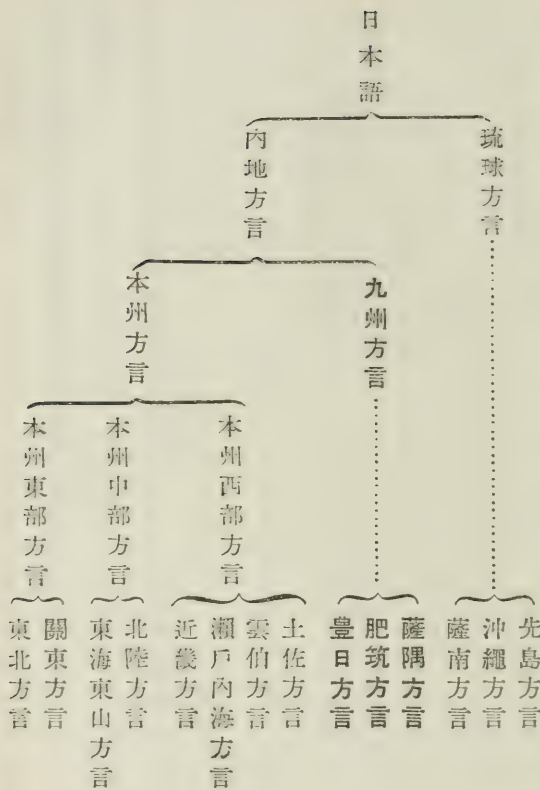
實物は四六判八倍大

○下二段は黃色で九州以外には和歌山縣日高郡及び埼玉縣豐岡町のみ

○下一段は薄青色で九州には小倉・福岡・唐津の三市及び宮崎縣延岡町地方のみ

○混用は黃地に橫線で愛知縣渥美郡のみ

らない筈である。既に今日迄に於てさへ氏の意見は、幾多の補正論を提出されてゐる一方に、未だに可なり多數の盲從者を有してゐるから、自分は九州方言に關してのみ一通りの檢討を行はさせて貰ひ度い。問題の焦點は自ら九州方言が日本語に於て占める區劃置位と內容價値とに向けられる。

抑々東條氏は從來の日本語東西二分說に物足らなさを感じて、次の如き方言區劃を提示された。今是を便宜上、『國語の方言區劃』四二頁所載の圖を西南から東北の順序で竝べ替へて九州の部を太字にして見る。

有の中で琉球方言に關しては自分は意見を差控へなければならないが、差當り九州方言に關係する限りに於て、若し琉球語を姉妹語と見て國語の一方言とは見ないとすると、

鹿兒島方言の如きもつひに國語の姉妹語と見なされねばならないやうな事にはなるまいか(一七頁)

と云ふ文言に於て、九州方言の中でも南の薩隅方言は又一種獨自の特殊性を有する事を氏も強調されて居る點を指摘紹介して置き度いと思ふ。

先づ九州方言として一括されるものが他の内地方言即ち本州方言に對する區劃地位は如何。是は先づ此の區劃は何處迄も現代日本語に關しての言語事實であると云ふ事を前提としたければならないのであつて、國語史に於ける九州方言の位置なるものは果して當初からかゝる姿に歸せしめる事が出來ようか。前項の「記錄」や「文學」で洗ひ渫ひ懸竝べた資料でも讀者は既に賢察される通り、今日本語史を便宜上室町末期から江戸初期へ掛けての推移期——「au」から來た開音のオーは「ou eu」から出た合音と差異がなくなり、「ei」は段々「e:」に移り、「F」は「h」に變り、「ジ・ヂ」「ズ・ヅ」の區別は亂れ、動詞・助動詞の二段活用は一段化して來るし、係結は漸時用ゐられなくなつたなどを主現象とする——を境として古代と近代とに二大別する事を是認するとすると、九州方言は總じて貧弱ながら近代生活史は所有してゐるが、古代のそれは全く空白となつてゐる事である。現代の九州方言を構成する種々の特徴は主として近世に成立したものであつて、精々平安朝も半以前に溯れば、本州の殊に西部方言との間には著しい相違點は無かつたのではあるまいかと思はれるのである。今日尚東海道は遠江の濱名湖今切(いまぎれ)、東山道は信濃の鳥居峠、北陸道は越後の親不知(しらず)子不知を連ねる日本アルプスは著しく東西の陸路交通を阻害するのであるから、況や古代に於ては東西本州間の方言差異な

るものは九州方言と本州方言とのそれよりも遥かに顯著であつて、九州方言は西部方言に屬する一部分と見做したいのである。室町時代に至つては、九州方言と本州西部方言との間に可なりの差異が出來てゐた事は當時の文献から見て推定出來るのであるが、それでも本州東部方言に對して見ると兩者は多くの共通要素を持つてゐたのである。即ち近世に入つてから九州方言はその發達の歩みが頓に緩漫となり或は停止さへした爲、現代の如き地位を日本方言區劃に於て占める樣になつたと云ふ事を忘れてはならないのである。(7) 兎も角併しながら過去三百年間に於て生じた國語現象の淸算に由つて九州方言の區劃位置が明確に把握されたのは學運の一進歩と言はなくて何であらう。

次に九州方言が日本語に於て現在如何なる内容價値を有する哉。氏は項目に「古代語と九州方言」なる文字を組合はされた上に、國語の變遷は立體的及び水平的に現れる植物帶の變化と同じであると云ふ前提を以て、

琉球方言に原始國語の俤を想像した我々は、九州方言に室町時代以前の古代語の姿を發見する事が出來る。九州はこの古代語の世界である(二四頁)

九州は明かに古代語の世界である(二六頁)

とされたが、是は少し書き過しでなければ書き足りなかつた嫌はあるまいか。「室町時代以前の」と云ふ形容句を冠せられても、前後の關係上此の語勢文脈が齎らす「古代語」なる名稱は平安、否奈良の言葉のみを指示するのが普通であり直接的であらう。十九世紀半迄は泰西でも許容された舊派比較言語學の考へ方を蟬脱しようとする限り、即ち吾人は九州方言の基調は近代日本語發生期即ち室町末期から德川初期へ掛けての中央語の俤の謂であると補註しなければなるまい。(8) かくしてこそ、その或點では近代日本語よりも新しき發達を遂げてゐる近代琉球語も併し矢張り大局から

見ては、氏が新潮社の『日本文學講座』第九卷「方言研究と方言文學」（二年八月）改訂新版第十四卷（七年十二月）で記される、

琉球方言には我古代語の俤が殘つて居る（一八七頁改訂新版二九五頁）

と云ふ一句が誠に意味ある追記となつて來るのではあるまいか。

さて『國語の方言區劃』で九州方言は、

音韻、語法に關して東北方言と類似の多い事は注意すべき事である（二七頁）

し、土佐方言は、

九州方言に類似のある點に、その特異な點が見える（三五頁）

のであるが、所屬不明の八丈島方言も、

形容詞の語尾變化などはむしろ九州方言に近い（三九頁）

のであつて、

一體から云つて東北地方は語法、音韻の兩面から考察して九州や琉球や出雲に似たところが、かなりに多い。(9) 南北兩端の地方の方言の間に、多くの類似があると云ふ事はまことに見免すべからざる謎語であつて、學者の解決すべき興味ある好題目である（四〇―一頁）

と公平な論斷をされた氏が語彙に關しては、(10)

單語から見ても、サルク（歩く）ウッスル（棄てる）クヒブク（俯伏す）などのやうな九州だけに分布してゐる古形の動詞があり

とされた文言でも想像出來るが、特に二十世紀初頭佛蘭西に擡頭した新興言語地理學の洗禮を遂に受けずに了ふ人々

は今後矢張り案外に多いのであらうか。

最後に九州方言の內部區劃に就ては、その三大方言の名稱と云ひ、分類標準と云ひ、誠に穏當なものと見られ、勿論かゝる方面に於て部分的な補正は今後同好者各自の課題であるのである。

三年になると橋本進吉教授の用意周到なる『文祿元年天草版吉利支丹教義の研究』(十一月)が發刊されたが、その本篇所收の「用語について」は九州方言に關しても精緻な論文である。

四年には長沼賢海氏の『南蠻文集』(十月)が上梓され、諸方面で物議を釀した樣ではあつたもの丶、その「解題」に於て頻出する所謂九州方言は併し賑かなものであつた。(11)

五年には「言語誌叢刊」第一期刊行の一として柳田國男氏の『蝸牛考』(七月)が出版され其の劃期的な「方言周圏論」は從來の文獻偏重或は局部的方言禮讃の舊式語源論に大恐慌を與へる事となつたが、玆に日本放送協會九州支部の熊本放送局は新設姉妹局福岡放送局と提携して十二月下旬から「九州方言講座」なるものを起して講師九人九回を出動させ翌年三月中旬に完了、小冊子『放送講演集・九州方言講座』(12)(六年五月)を印行した。

六年には東京、廣島、京都の各大學に方言學會が設立されるし、九月には『國語教育』が「方言研究號」を出すのみならず、春陽堂は此の月から月刊專門雜誌『方言』を出す勢となつた。東京で「九州方言の會」(13)などが催される一方に、福岡では根本資料殆ど絶無の境遇を押して、日本國語史及び九州言語地理の部分的決算促進の意圖を有する大膽なる「九州方言の特異性」(14)が幾人かの机上を汚した。

七年になると帝國學士院は學術研究奬勵資金を「九州方言の研究」にも下附するし、(15)『鹿兒島教育』は小規模ながら第

四七）號として「鹿兒島方言研究號」（十二月）を特輯すると云ふ點である。

八年に於ては九州の何地にも未だ方言學會の起らざるに全國中繼第二回「ことばの講座」には實積俊造「九州の方言」を一回（七月）行はしめ、言語地理方面の調査殆ど未着手なるに明治書院の『國語科學講座』に早くも「九州の方言」が進出する氣運に到つたのである。(16)

尙維新以後の方言資料は既出未出の目錄(17)に讓り、吾人は次の項目へ向はねばならぬ。

註

1 「東京地學協會報告」第八卷第八號（十四年四月刊）へ「上代地名考」として轉載。要領は島田次郎氏が「歴史地理」第十七卷第六號の論文でも得られる。因に金田一京助氏が「民族」第壹卷第四號の「アイヌ語學研究資料に就て」や雄山閣「郷土史研究講座」第十三號「アイヌの生活と民俗」一七三—四頁、さては「（金澤博士還暦記念）東洋語學の研究」の「北奧地名考」を一讀す可きである。

2 『九大國文學』第二號六〇—二頁、『文學研究』第五輯八〇—一頁。

3 日本語の母音組織は元來 a i u であつて、ai ＞ e、au ＞ o となつて a e i o u の五母音が備はつたと云ふ否濱言語學思想は、イェヴギェニイ ドミトリイエヴィチ ポリヴァノフ氏が自國語もて莫斯科で一九一四年（大正三年）に發表した「日琉語比較音聲論」（「方言」第四卷第一號へ譯載）に於て唱へされてゐる。從つて十數年遅れて伊波普猷氏の所謂琉球語母音及び口蓋化論なるものが「國語と國文學」第七十六號あたりで纏められた形となるのであつて、西洋人の先蹤には全く敵はない。因に市河三喜博士及び神保格氏の譯「イェスペルセン言語」第一篇の殊に第四章第二節など味讀す可きである。

4 長崎縣西彼杵郡三重村の方言と民俗とを研究した此の貴重的好資料は今や著者自身も紛失して了つてゐるさうである。

5 坪井九馬三博士の「我が國民國語の曙」、新村出博士「東亞語源誌」の「隼人語と馬來語」。因に此の問題は蝦夷語本邦地名

解釋と同樣に愼重な態度を取らねばならないと思ふ。

6　春日政治氏の『國文學講座』第二冊「國語史」、新潮社『日本文學講座』第十四・八卷「國語史上の一劃期」（新訂新版第一卷）。吉澤義則博士『國語史概說』の「近代語の發達」。橋本進吉博士が岩波講座『日本文學』の「國語學概論（下）日本語の變遷」。

7　「民族」第參卷第四號の橋本博士が「歷史上から觀た日本の方言區劃」。

8　「放送講演集・九州方言講座」で原田芳起氏が「鹿兒島縣の方言」九九頁。更に金田一京助氏著「新言語學」二五〇—一頁を味讀す可きである。

9　大正の末年に露人ニコライ　アレエクサンドロヴイチ　ニエフスキイ(Nikolaj Aleksandrovič Nevskij)氏は沖繩縣宮古（ミャーク）方言の音韻が東北地方のに酷似してゐる事を力說してゐた。

10　此の同系語が紀伊や土佐吾川（あがは）郡に現行する事を昭和七—八年に橋正一氏は發見された。因に此の音訛事象に關して龜田次郎氏に「爲歩く（しあるく）」の變化と解される由をニエフスキイ氏は語つてゐた。ニエフスキイ氏は「春雨・秋雨・長雨・小雨」等の「さめ」にあるS音と同じく、古代日本語に曾存して今や消滅した唯一的化石であり、「言語學雜誌」第壹卷第二・三・四・七・十號所載の保科孝一氏の「八丈島方言中」に於てもS殘存の似た語例を見付けたと言つてゐた。

11　岩波講座『日本文學』の新村博士が「南蠻文學」も此の餘波と評す可きであらう。

12　『方言』第一卷第二號及び第二卷第十一號には補正がある。

13　十月十日午後今泉忠義氏宅。

14　「九大國文學」第一・二號、「文學研究」第二・三・五輯、昭和六年九月—八年七月。因に『日本文學』第三卷第五號の山下邦雄氏が「鹿兒島語を研究する人々」を參照。

15 「官報」第千五百四十九號「學事」四三頁、尙八年度も繼續であつて同第千八百五十一號同一〇七頁で公布。

16 「方言と土俗」第三卷第十號三九―四〇頁、第四卷第一號二九―三二頁、第三號表紙の三に於ける橘正一氏の批評參照。

17 東條操氏「方言研究の過程」(『國語敎育』第一卷第一號)、「方言研究書目」(『鄕土研究』第四卷第七號)、「國語方言資料目錄」(『國語敎育』第十二卷第三號)、「方言書目抄」(『方言採集手帖』)、「刊行方言書目」(『國語敎育』第十六卷第九號)、「刊行方言書目解題」(『方言』斷續連載)。

大田(舊田村)榮太郎氏「方言參考資料目錄」(『國語國文の研究』第十五號及第十七號)。

日下部重太郎氏が『現代國語思潮』續編の「大正・昭和時代篇」一五「國語の音聲と方言との研究」も參照す可きである。

五 結論

1 特質

現代九州方言の特質を略述するに當つて前置をしなければならない。元來が本州西部方言の一部であつた爲、是と多くの共通點を有してゐるが、更に細かく見る時に四國や中國の方言と全く區別のつかない要素が存する。

邊境の地に位するが故に、日本の周圍の諸方言と同樣、本州中央方面では現在失はれて了つた幾多の古形を保存するが、特に東北地方と相似たる點が多い。

九州方言の具有する要素は、本州中央方面にも點在するは勿論、時には九州の方が本州よりも新しき發達を經たと思はれるものもあるが、矢張り海を隔てたその特殊的位置よりして內地方言中では他に見られぬ古形が多い。九州方言は南と北又は東と西とで著しい軒輊を示す事があり、其の多樣性は時に一條の說明では律しられない。年齡や教養の相違は勿論ながら、普通語卽ち標準語との關係に於て獨自の現象を示すが、是は日本の政治史や文化史等から樣々に解釋される筈である。

さて吾人は次に重要と見做される事項を順次展開するが、(1)音聲のみに關してさへ獨特と云ふ名稱の影は頗る薄い事が感じられる。

音聲

アクセント　本講座に別に服部四郎氏の一項目が存するから就て見られ度い。

母音　口蓋圖も口形圖も未だ發表されてゐないが次の事位は言へる。

長短に關しては、北部では近畿方言程ではないが短音を「カー」(蚊)「ミー」(箕)の如く長音化し又「コユイ」(濃い)「ハワク」(掃く)の如く重音化する傾向が可なり存するが、(2)南部の鹿兒島言葉圈內では是と反對に北奥地方と等しく長音や重音を「ホソ」(疱瘡)や「デデ」(橙)の如く一律に短音化する(3)のが面白い對照をなして居る。鼻母音(4)も所々には存する樣である。

「アィ ai」は『博多小女郞波枕』の「見がい」(見に)や『物類稱呼』の「さなへ」(方へ)、さては現行の「ナィ」「ネー」(肯定返答)の竝存などから推しても、近く迄九州に廣く亙つてゐた重母音であらうが、現在では內部區劃の重要標識と

なる程の分化を遂げてゐる。卽ち「ャアー ɛ:」は西北部、「エー e:」又は「エィ ei」は東北部、「エ o」は南部となつてゐるが、壹岐・對馬や筑前には「エー e:」とある樣な分布問題は兎も角、種子島の「アー a:」などは特異なものゝ樣である。(5)

「イ i」は「エ e」と盛んに轉換する樣に思はれる。「コリ」（是れ）「ソリ」（其れ）や「トィチ」（泊めて）「ヨーチ」（讀んで）は勿論、「ナシ naʃi」（何故）なども合點が行く。

「エ e」列音は中舌的で明きの狹い爲、一種の粘つた感じを有し、(6)日本の中央部人士の耳には所謂邊境地方共通の田舍臭い響を與へるのである。因に「エ」の長音は西部及び南部では「エィ ei」と重音にする傾向がある有樣である。

「ウ u」は四國などゝ同じく、はつきりと口角が左右から寄るのが見え、音もやゝ奧に籠つて響くと云ふ。(7)

「オ o」列音を「ウ u」列音にする傾向の多いのは重要な現象であつて、是は古代日本語の文獻に見える轉換の名殘と見る可きか、又は「アィ ai」の分化と同じく九州方言が近代に於て初めて開始した變化であるか問題であらう。是は土地、言葉、更には場合に由つてそれぞれ差異があり、外來者は例へば「オー」「ウー」（大）の何れを採る可きかに惱まされる樣な場合があるのである。

その他地方に由つて各種の母音轉換があるが餘りに問題が細かくなるから省略する。

子　音　是も勿論大體論である。

拗音は別に珍しくないが、淸濁に關しては「ヌグ」（拔く）「フク」（河豚）などの轉換現象よりも、所謂淸濁何れともつかざる半有聲音若くは是に近き音聲現象(8)の調査が重要ではあるまいか。所々には確に存在する筈である。

入聲音卽ち內破音（implosive）が南部の鹿兒島言葉圈內に存してゐて、(9)他國人には「急ッ」「事ッ」「帶ッ」更には「狩ッ」

の如き用意に由つて初めてその特殊相が意識されるのである。

促音即ち長子音に於て南部の同じく特異なる方言圏内では、「ヤッハッタ」(燒拂つた)の如き珍らしきもの丶外に、有聲音の場合でも常態的に「スッネ」(少ない)「イッモシタ」(行き申した)などを使用してゐて、北部、否獨り此の場合に限らないが、南部に於てさへ南方海上の島々の言葉に對して特異な色彩を持つてゐるのである(10)

「ガ」行音は全部有聲軟口蓋破障音「g」を以て一貫する。

「クヮkua」「グヮgua」は南方には存するが(11)、大分・佐賀縣には無い地方があるし、福岡縣は筑後を除いては此頃は消滅してゐる。

「セse」「ゼze」は却つて南部の鹿兒島語圏内で行はれるが、その他の地方では矢張り三百年前の「シェʃe」「ジェʒe」若くは口蓋化音「スェsʃe」「ズェzʒe」を以てする。特に此の音聲は同一地方に於ても年齡に由つて著しき推移差が看取される様である。

「ティti」「トゥtu」に近いものが大分縣あたりでは未だ用ゐられてゐる。是は中央語では鎌倉末期頃迄は存してゐた。

「ジʒi」「ヂdʒi」と「ズzu」「ヅdzu」との區別は長崎・宮崎縣下では正確に行はれ、福岡縣も筑後地方では未だ可なり保たれてゐるのである。

「ハ」行音は「スナハチ」(即ち)「ヤハタ」(八幡)の「ハ」や以前は「クフ」(食ふ)の「フ」を其通り發し或は今でも「ヒ」に當る所をよく「フ」と言つたりにするが、無聲兩唇摩擦音「F」は今や大部分の地方に於て耳にしない様である(12)。

「ヤ」行音の「イェie」は南部や西部には存してゐる。是は中央語でも平安朝初期頃迄は存してゐた。

「ワ」行音は語頭ならざる「ウェ(we)」なら南部及び肥前一圓にあり、總じて「ウォ(wo)」は南部及び長崎縣には行はれる筈である。何れも中央語では平安朝末期頃迄は存してゐたのである。

「ラ」行音は隨分問題が生ずるらしく、西郷隆道が遂に「從道」になつた程特に九州、其の中でも南部に甚しい「ダ」行音との混同轉換(13)の外に、對馬では「ロ」以外は皆母音を脱落して而も側音(l)を以てする事實を忘れてはならない。

其他各種の轉換や、撥音で終る名詞の後へ來る助詞「は」は「ナ」となり「と云ふ」は「チャ」となる樣な文章構成時の融合現象などは今一々擧げない。只此處へ書き添へて置き度いのは、助詞の「の」を「ト」と云ふ通則が筑紫言葉の一大特徴である事で、卽ち「良かト」(良いの、良からう)や「行きよるトイ」(行つてゐるのに)の如く用ゐるのであるが、同時に又一定の慣用法があつて例へば「新しかトのは」(新しいのは)の如き形を取る事を注意しなければならない。

語法

動詞　顯著なる二段活用の固着性と共に四段活用の吸引力が亦その特徴となつてゐる事を無視してはならない(14)。かくて本州東部では上一段化された「飽く・借る・足る」が本州西部と同じく元來の四段で留まつてゐる上に、古來上二段なる「恨む」が今や九州でも殆ど四段化されて了つた現象などを容易に理解する事が出來よう。

四段動詞は先づ「ハ」行活用の語尾直前が「ア」列音なるもの丶連體形・終止形に於て、「養ふ人」「舞ふ」の如く元來の「ア」列音を存して重母音となるのは本州東部式、「養ふ人」「舞ふ」の如く「オ」列音に變じた長母音を以てするのは本州西部式であるが、九州では所に由つて兩者共に行はれてゐる。次に連用形が「て」「た」に續かれる時、「サ」行はイ音便を、「ハ」「バ」「マ」行はウ音便を取つて、「指イて」「笑ウち」「呼ウだ」「沈ウどる」の樣になるが、是等三百年

前の中央語の面影の中で、「サ」「バ」「マ」三行は今や九州語の特質となつてゐる。
一段動詞は「見らん」「寢れ」等の如く上下活用共に一般に四段化する傾向があり、是は今や全國的に「ラ」行四段化されたと見做す可き「蹴る」と趣が同じと稱し得よう。
二段動詞の現存は九州方言の一大特徴であつて、三百年前の中央語の面影を今尚濃厚に漂はすものであり、即ちその終止形が連體形に併呑された點を除けば更に王朝時代の國語と全く同じ活用を行つてゐる譯なのである。此の形は稀に出る「過ぐる年」や化石的な「翌日」など以外先づ現代の本州方言では見られないのである。尤も近代的の一段化運動は昔からも殊に北部に於ては可なり劇しく行はれてゐて、而も上二段の方は、訛形「起ける」「落てる」の如き例でも分る通り、より早く一段化を開始したらしい爲にその分布狀態は現代九州方言の內部區劃の一標準となつて居り、即ち上二段は筑前・兩豐・日向には未だよく保たれてゐても筑後・肥後・北部肥前では先づ一段化されて了つてゐると稱しても大過なからうが、下二段の方は北九州の殊に都會地を除いては未だ全筑紫洲を蔽つてゐるのみならず可能相の短縮形「讀める」等を「讀むる」と言ふ程の勢である。
「カ」行變格は特に命令形に於て「來い」「來う」「來え」の如き訛形を用ゐる。
「サ」行變格は漢語の下に續く時も本來の活用を保つ地方の方が多い。命令形は本州西部式の「せい」「せよ」の外に「せう」「せれ」「しよ」の如き訛形を用ゐる所がある。
「ナ」行變格は北部では「死ぬる時」「往ぬるか」の如く連體形・終止形には古形を用ゐる人が未だ存する。
「ラ」行變格は本州と同じく全く四段化してゐる。

助動詞　受身は九州の大部分で文語に近い「るる」「らるる」「さるる」を使用する。

使役は同樣に「する」「さする」を用ゐて、本州東北地方と呼應して古形を保つ。

指定は關西式の「ぢゃ」「ぢゃった」「ぢゃろう」を用ふるが、只肥後一圓では關東式の「だ」「だった」「だろう」が行はれるのである。何れも「である」から發達したのであつて、それぞれ現在・過去・未來を示す。

否定は關西式に「ぬ」から出た「ん」を用ひ、下に「て」が續く時は「書かいで」の如くなる。但し過去には「んだった」「んぢゃった」或は（「ずあった」から出た）「ざった」を用ふるのが九州式である。

未來は「む」（ん）から發達した「う」を用ゐるが、四段動詞以外への接續に於ては語尾と共に單音節長音に發する三百年前の過渡期の姿を未だ脱しないで居り、而も九州式に「入れょう」（イリョー）と發音する。以下も總同じ「見ゅう」「亡びゅう」「來う」「爲ゅう」とする形が多い。

推量は「らむ」「つらん」から由來した「らう」（ロー）「つらう」を用ふるが、前者は「書くらう」の如き特異な接續方法に由り、後者は「讀みつらう」の如き古形の殘存に由つて本州方言と手を切るのである。

敬譲は受身助動詞が轉用される外に、元來一定の意義を有してゐた動詞から發達したものが澤山あつて、九州に於てもその方言特質構成の重要分子となつて居り、内部區劃にも有力な役割を勤めるのである。近代大阪の傳來か現代東京の影響か或は獨自發生か問題なる可き「だす」「です」は暫く措いて、同じく全國的な「御座す（る）」「やす（る）」の外に、北部で普く行はれる「なさる」「下さる」「くれなさる」の中にも肥後や、南部肥前では近畿に似た「はる」を用ゐ、肥前・筑後では「仰せつけらるる」、筑前では「遣はす」の訛形が使はれる樣な事は勿論獨特とは言へなくとも今後益々觀察

記錄の必要があらうし、特に南部では「おぢゃする」「おさいぢゃする」（お出である）「たもする」（賜る）「ぎゃする」（御意あるか）の如く豊富に存在してゐてその特異的色彩を助長してゐる事を注意しなければならない。併し九州で最も興味あるは、少く共直接的には「參らす」から由來したと考へられる全國的の「ます」が東北部では擴がつてゐるが、西北部ではその前身たる可き「まつす」「まーす」が勢力を振つてゐる上に、今や殆ど過去の文獻にのみ見られる過渡期の「まらする」が訛形「めーらする」と共に甑島に殘存してゐて足利末期の抄物に於ける姿を如實に示してゐるし、是に對して南部には異系統の「申す」から出た形が活躍して居り、此の過去三百有餘年間の國語史の一縮圖はその儘現代九州方言內部區劃の一標準ともなつてゐる事である。(15)

形容詞　連用形はウ音便を取つて「善ウ」「美しウ」の如く元來の「く」を失つた本州西部式であるが、玆に北部では「て」が續く時は「嬉しうして」の樣に「し」が入つたり(16)、「無うで」の如く「て」が濁つたりする特徵がある。(17)

連體形・終止形は「くある・くあり」から發達したと考へられる「か」(18)が西部及び南部で行はれ「善か人」「花の美しか」となる。是は本州東北地方に化石的存在があつたり、八丈島に「ーけ」があつたり(19)、又九州でも東部では全然存しないのであるけれども、近代九州方言構成期以來の最大標識と稱してよい特質であり、現在でも內部區劃の標準として重要である。尤も漸時中央化されて行く傾向はあり現に「ーい」と混用されつゝはあるが(20)、一方には人に由つて「綺麗か」「徒然なか」の如き類推作用も見られる程であり、「善か」などは關西式の「えい」關東式の「いー」の使入を受けながらも殊に連體形の時には强度の固着性を發揮して居り、是に次いでは「無か」が仲々消え難い樣である。江戸言葉及び東京語では「お早う」「好うこそ」等の挨拶句や「宜しう御座います」等の丁寧な言葉遣の時には片親たる關西方言が顏を出

す現象と比較すると面白いと思ふ。

已然形では中國地方にも行はれる「無からねば」と云ふ否定形式只一箇が特徴となる。(21)

助　詞　廣く日本語に於てのみならず九州方言内に於ても重要な標識となるのであつて、所謂品詞に分解して了つた方言書には無視されてゐるものが澤山あるのである。(22)

接續詞では「ばとても」から出た西北部の「バッテン」とその訛形各種、「ども」から出た南部の「ドン」とその複合形、「けれども」から出た東北部の「ケンド」の一類の鼎立は最も著名であり、此の外にも「から」に當る西北の「ケニ」「ケン」「ケィ」と東北の「キー」とが南の「デ」に對立してゐて、それ〴〵反對、理由を示すに用ゐられて居り、中央方面へ全然紹介されてない様なものが幾多存在してゐる。

格關係を示すものでは、主格につく「の」とその訛形「ン」が九州的となつてゐるが、(23)「をば」から出た本州東北地方にもある「バ」を對格に用ふるのは北部には通用するが南部では却つて標準的の「ヲ」を使用すると言つた様な事を注意しなければならない。動詞連用形に接して目的を示す「ギャー」「ゲー」「ゲ」などは或程度迄は彼の標識「アィ」母音と運命を共にしてゐるとも見られるが、體言に續いて方向を示す「様」の訛形「サミャ」「サニャ」「サメ」「サネ」「サニ」「サン」「シャン」「サィ」「セ」「シネ」などは雜然としてゐて大摑みな區劃は立てられない様である。

强勢も「ばし」(でも)などは兎も角、「こそ」から出た「コサ」「コス」「クサ」「クサィ」「クサン」「クソー」や、「さへ」に當る「シャカ」「サィカ」「セキ」「セカ」などは矢張り同様と稱せられよう。

語尾に就ては詠嘆の「わい」や疑問の「かい」の如き全國的のものは措いて、北部の「バィ」「タィ」「ザィ」や南部の「ト

ー」「チー」は特質構成要素として優なるものである。(24) 更に今少し細かに検する時、福岡市の博多部では「ペイ」「ティ」なる訛形の竝用が特徴であり、人口稠密なる筑後河下流一帶では「ばな」「ばの」「たの」等と同系たる可き「バン」「タン」「カン」の如きものが發生してゐるし、此の現象の上に更に佐賀の舊鍋島藩領では二人稱代名詞から出た「バナタ」「カナタ」や「バンタ」「カンタ」が重複して特異性を形成して居たり、九州全土、否全國的なる「げな」が大隅では用ゐられるが薩摩では使はないと云ふ様な事も今後追々記錄して行き度いものである。因に元來筑後・兩肥にのみ見られる命令法の「ろ」は近世以前に本州東國語が移されたものかと解される。(25)

文章法　次の事位は竝べられよう。

特に動詞へ接頭語が附いて「キャー歸る」「ハッ行く(チ)」「ケ死ぬ」の如くなる形式は、接尾語の語例と共に、九州では南部に行く程甚しい傾向がある様である。

現在進行形を取る時に動詞連用形の下へ「居る」を接し又「て」を挿入而も融合して「よる」「とる」「ちょる」とするのは九州全土でも頻繁に行はれ、是に次いでは「て在る」から出た「ちゃる」が耳につく。

可能法に於て連用形に動詞「切る」を續けた形が好まれるが、所に由つては否定の時には「讀みきらん」でなく「得(え)」を上へ付けた「得讀まん」なる形式を取る事がある。(26)

敬語法は助動詞の外に二人稱代名詞を語尾へ附した形式が漸時その微細な意味の轉化を行つて、途には「ーあなた」「ーあんた」や「のーまい」「のまい」(のう、お前)の様な語尾となる徑路なども好課題であらう。

形容詞「ごとし」の奈良朝時代に連用形として多く用ゐられた語幹「ごと」が其儘傳存したものか或は再轉したものか

は兎も角、殊に「善かごと」(善い様に)「善かごたる」(善い様な)などの語句は、是こそ筑紫方言が唯一的なものとして誇り得る最後の切札であらう。

否定文で問ひ掛けられて否定文で答へる場合に、英獨語式に先づ「いや」「いゝえ」を以てする所がある。

特に人稱代名詞が主語であつて名詞が客語になる時に、主格助詞及び指定助動詞を省略と云ふよりも無用視して、「私(おどん)・九州人」の如き形式を常態的とする地方が未だ存する様である。是は廣く日本語更には人類の言語の文章發達史上頗る興味ある問題である。

語　彙

此處にはあらゆる品詞が包攝されるが、今や言語地理的に見て、九州島だけが特有とするものと云ふ考は殊に用言や體言に關して極めて危險となつて來た。『日葡辭書』や『物類稱呼』などの貼札に頭から賛成して了ふなら兎も角、日本語の語源論も古代からの文獻渉獵と全國に亙る方言調査と相待つたる努力でなければ著しく價値が減じて來てゐるのである。從つて可なり惠まれた境遇にある人でなければ勞作に從事しても自他共に益する所極めて少い事を知らねばならぬ。九州方言の語彙採集の目的は局部的特異性認識ではなく、日本言語地理學に素材を供給するにある。例へば萬葉の難語を筑紫言葉で解釋しようと云ふ立場は認容出來るが、源氏の用語に西國方言の混入を篩ひ分けようと云ふ態度は非難されても仕方がない。全國方言語彙が豐富に獲得されるに從つて、前者の便宜上の一時的方法は單に補正されるに過ぎないが、後者の眼界狹少なる遊戲的態度は論文目錄以外殆ど活用の仕方に困るのである。[57]

少くとも所謂狹義の單語に關しては方言區劃なるものは形成出來ない中にも、日本に於ては本州中央部で發生した

新語は周圍へ周圍へと押し流され、かくて所謂「古語は方言に殘る」は昔からの通用句であるが、西南は邊境の[28]特に東北と呼應して居る。[29] 即ち九州的なと考へられてゐる「アケヅ」(蜻蛉)「ムゾイ」(可愛い)「アクト」(踵)等は遠く奥羽にも同系語が存するのであり、是は實に彼の筑紫語の標識たる「ばってん」に就てさへ言へるのは勿論、是亦昔から西國語の手形とされた「さるく」は近くの南海道と連絡して中央部へ接してゐるのである。

尤も「ねまる」が奥羽や北國では「居る」關東では「寢る」だが筑紫では「腐る」と轉意してゐる様な特質なら輕視出來ないのであつて、[30] 各地にあらうにしても「太い」(大きい)「細(ほそ)い」(小さい)は勿論「潔(いきぎ)よう」(非常に)や「來る」(「行く」にも用ふ)の如き、さては接續の「時(に)が」(所が)や「切(きり)には」(日には)の如きも注意する必要があらうし、「ぬぐ」(拔く)と「ぬく」(刀を鞘に入れる)、[31]「あなた」(あんた)と「あんた」(お前)の差異の如きも精査の必要があらう。推量助動詞「べし」から發達した「關東べい」と似而非なる詠嘆語尾「わい」と同類の「西國ばい」――是は自分の呼稱であるが――とを同一視、[32] 否、無視する様な片手落は漸時改めて行かなければなるまいし、南九州の「かゝ」(母)を日常談話に出しては「コラ〳〵」(もし〳〵)と同様北九州人にさへ笑はれる方言意識は今後益々精査す可きであらう。

詰り地方的相違は充分强調しても只九州にだけしか無い語彙を竝列すると云ふのは普通先づ無意味な様に思ふ。

最後に特に九州西部に多い近世以來の外來語の蒐集[33]及び炭坑の特殊語調査[34]等は、事少し吾人目下の論究對象の焦點を外れると思ふから是で切上げる。

以上の概念的說明では活々した九州方言の全貌を味識して貰ふ所迄行かないのは勿論であつて、耳から直接此の方言に接する機會の無い讀者はせめて德川期の軟文學、維新以後の作品を拔いて宜しく說明の不備を補はれ度い。因に

九州で創作され印行された郷土方言文學資料は、その內容價値の爲に大して重んぜられないが、入手は固より一覽さへ不可能になつてゐる物が既に多々存するのである。

2　區　劃

最後に九州方言の空間的範圍と內部區劃とを一言しなければならない。抑々政治上は沖繩縣をも經濟上は山口縣をも包擁する所謂「九州地方」の廣義に對して言葉は凡二千三百餘方里の筑紫洲に限られて居り、更に中國山脈の延長なる筑紫山脈と四國山系に脈絡ある九州山系とが南北東西の大別を作つてゐる。十七世紀始めの長崎版『日本文典』や其の他常識的な見解でも大過は無いが(35)、東條操氏は西・東・南の三大別に「肥筑・豐日・薩隅」(36)の名稱を與へられたが、是は「アイ」二重母音、上二段動詞の活用形、形容詞の語尾、種々の助詞の用法を標準とされたのである。是に今一つ敬讓助動詞を標識にされる可きであらう。兎も角此の三大別に就て親疎關係を見る時、西・東は合して北となつて南に對するが、茲に北と南との差違は北と本州西部とのそれよりも遙に大であると云ふ事である(37)。併し九州方言圈內だけで考へる時は、西は南と結んで東に對する要素も認められ(38)、又本島を數區分した上に西及び南の島々をそれぞれ大別して見る試も面白からうが(39)、何れにせよ、內部區劃線なるものは漸移帶と云ふ現象があつて獨り九州に限らず厄介なものである。

以下の略述は『國語の方言區劃』の記述(廿一及廿八―九頁)を基として僅かに百尺竿頭一步を進めようとしたものに過ぎない。只『大日本方言地圖』の九州に於て縱橫殊に北を東西に分ける線は現在の知識に由つても左右に動く補正線

が部分的に加へ得る事を知らねばならぬ。尙各方言特質は最早繰返さない。

對馬――元來大八洲の一に算へられた此の上下の二主島は地理的位置の爲に複雜であつて、本州西部方言が可なり混入してゐるが、朝鮮語の影響は語彙七十餘箇が調査發表されて居る(40)のみであつて世人の想像以上に稀薄である。大體に於て肥筑系である。

壹岐――肥筑系に屬する。肯定返事「ナィ」が存する。(41)

肥前・肥後・筑後三國は古來九州方言の典型的なものとされ、肯定返事の「ナィ」「ネー」は勿論幾多の九州方言代表物を具有してゐるのである。

肥前――本土方面は少く共北南の二大別が許され得よう。北方は佐賀市を中心とする舊鍋島藩領であつて卽ち東松浦郡を除く全佐賀縣下の方言である。(42)南方は長崎縣下に屬する地方であつて、その南高來郡なる島原半島は寛永十四年(一六三七)の天草亂以後中國・四國からさへの移民が多い。(43)大部分が南松浦郡に屬する五島方面は大體に於て南方と大差無い。(44)

肥後――何れも周圍地方であるが、阿蘇郡の北・東部は豐日系に屬するし、球磨郡及び葦北郡は薩隅系要素に侵入されてゐる上に、天草郡は天草亂以後は豐日系さへ入つてゐる次第であり、(45)八代郡には彼の五ヶ庄地方がある。

筑後――筑後河及び矢部川の河口地方の舊柳河藩領と中流地方の舊久留米藩領を中心とする南北の二大別は無視出來まい。(46)

筑前――肥筑系内に於て前述の筑後・肥後・肥前の典型的九州語に對立する事、恰かも本州西部方言の一部たる近畿

方言内で京都系と大阪系とを分括出來る樣な關係にある。そして筑前方言は更に筑紫山脈に由つて東部四郡と西部五郡・福岡市との二對立が意識されるのである。(47)

豐前――田川郡は肥筑系に侵されてゐるが、北端の小倉市邊は頗る近代化してゐる。(48)

豐後――日田郡は肥筑系が喰ひ込んで居り、其他にも小藩割據してゐた爲に肥筑系の飛地が多い。(49)

日向――南西部の西諸縣・北諸縣兩郡全部及び近時宮崎化しつゝはあるが東諸縣郡の西部大部分(木脇村全部と本庄町大部分とを除いた全部)とは島津領であつた爲、是等の諸縣方言と殘餘の宮崎方言との二大別は是非行はねばならない。(50) 元來日向は四國・中國方面からの移民が多い一方には西臼杵郡の椎葉村や兒湯郡の米良地方は隱れ里の稱がある。

大隅――海上最南方の大島郡に屬する島々の中で、奄美大島群島は琉球方言であるが、川邊十島は薩隅方言圏に入るのである。(51) 熊毛郡では種子島が薩摩藩と疏遠であつた爲に屋久島の如き本土の影響を受けて居らず却つて該地方で異彩を放つてゐる。(52) 本土は半島南部の肝屬郡南部を除けば所謂鹿兒島言葉の特異性に柔順に從ふのである。(53)

薩摩――半島南部の揖宿・川邊兩郡邊を除けば(54)所謂純然たる鹿兒島語であつて、北方は肥後の天草・葦北・球磨三郡へも喰ひ入つてゐる事は前述の通りである。

さて九州に於ける幾多の諸侯の興亡變轉の中にあつて、島津家は建久年間(十二世紀末)の忠久以來南九州に威勢を張つてゐた爲、南方言は藩主代々の政策に助長されて內地方言としては頗る距離を有する姿を發達させたが、薩隅本土の所謂鹿兒島言葉は實にその地理的位置からは琉球方言圏内に近い熊毛郡の島々よりも却て特殊な色彩を南方言の

中に於てさへ構成してゐるのである。北方言では少し趣が異るが、遠く本州東部方言の「言語の島」が二箇あつてその寡少なる人數はやがて問題にもされなくなるであらうが、琉球方言の集團とは自ら色彩が違つて來ると思ふので書き添へて置かなければならぬ。卽ち一は延享四年（一七四七）に磐城の平の內藤政樹が日向の延岡町へ移つた爲、今尙該地では[55]四五百人の奧羽系統の「家中辯」なるものが町辯に交つて聞かれ、今一は文化十四年（一八一七）に同じく磐城の棚倉の小笠原長昌が肥前の唐津市へ移つた爲、今尙該地の廓內と呼ぶ地に居住の二三百人[56]には關東系統（奧羽要素少なし）の「城內言葉」が地下の唐津辯に對照をなして居るのであつて、何れも使用者達は中老以上であり而も年々減少しつゝあるのである。

現代九州では人口廿萬臺の都會は福岡・長崎兩市のみであるが、北端の狹少な地域に數箇の都市が聚存するのが稍々目立つのみで、その代り町村は殊に南九州方面は密度こそ大ではないが人口一萬を超えるものが九十箇以上存するのである。

明治維新以後の行政區劃は方言のそれとは勿論一致してゐない事は言ふ迄も無いが、交通發達は殊に北九州方面は本州中央語に盛に蠶食されつゝあり、ラヂオの普及は益々是を助長するであらうと思ふ。此の利器の前にあつては關門海峽も豐後水道も全く古の意義を失つて了つてゐるのである。

註 1　『音聲の研究』第二輯及び『方言採集手帖』の「附錄」に於ける東條操氏の記述などを參照。

2　14　16　17　21　26　『文學研究』第四輯の春日政治氏が「『小學方言講義』より」

3　9　10　15　37　『國語と國文學』第七十七號の原田芳起氏が「鹿兒島方言の音韻現象に就いて」。

3 金田一京助氏『國語音韻論』九七頁、『音聲の研究』第五輯の同氏が「東北方言の發音とそのアクセント」一五頁。

4 『方言』第二卷第一號の橋本進吉博士が「國語に於ける鼻母音」。

5 15 『熊本教育』昭和六年九月號の原田芳起氏が「九州方言雜考」四。

5 44 『國語教育』第十七卷第八號の原田芳起氏が「九州方言系統論に就ての一つの覺書」。

6 『放送講演集・九州方言講座』の原田芳起氏が「鹿兒島縣の方言」九三頁。

7 金田一京助氏『國語音韻論』四七頁。

8 吉澤義則博士『國語國文の研究』の「本邦音符考」六頁、前間恭作氏『韓語通』九頁、伊波普猷氏『音聲學協會會報』第四號論文四頁、『岡倉先生記念論文集』の金田一京助氏「アイヌ語清濁考」、佐久間鼎博士『日本音聲學』一四五—八頁及び『一般音聲學』一一三—一二二頁、三矢重松博士『莊內語及語釋』の東條操氏「序」二—三頁、姉崎正治博士『切支丹宗教文學』の「序言」二頁、『音聲の研究』第五輯の金田一氏論文四—五頁及び三宅武郎氏「濁音考」。

10 原田芳起氏は『國語と國文學』第七十七號や放送講演に於て日本語の「極光的現象」とされ、金田一氏『國語音韻論』一一九頁「註」には「東國には珍らしいけれど、關西一般で京畿はいふに及ばす東海道線は三河まで來てゐる。決して鹿兒島や九州獨特のものではない。此は、東國にはまだ波及しなかつたまでで、或は恐らく室町以前の古い發音の殘りであらう。

11 新村出博士『東方言語史叢考』の「音韻史上より見たる『カ』『クヮ』の混同」。

12 同博士『東亞語原志』の「波行輕脣音沿革考」及び「國語に於けるFH兩音の過渡期」。『岡倉先生記念論文集』の橋本進吉教授が「波行子音の變遷について」。

13 多くの音聲關係著述に於て九州に觸れたものに、

大島正健博士『音韻漫錄』二四頁、岡倉由三郎氏『發音學講話』一三三頁及び『應用言語學十回講話』一一八―九頁、平野秀吉氏『國語聲音學』一三八頁、宮澤甚三郎氏『日本言語學』一三〇―一頁、神保格氏『國語音聲學』五〇頁、オレスト プレトネル氏『實用英佛獨露の發音』五〇頁、石黒魯平氏『國語教育の爲の音聲學』五五頁、佐久間鼎博士『日本音聲學』一五二頁及び『國語音聲學講話』二六六頁、金田一京助氏『國語音韻論』一九九頁、岩波講座『日本文學』の安藤正次氏『國語音聲學』五〇頁等であるが、奥里將建氏『國語史の方言研究』の「古語に於けるR音とD音」は吾人に取つて貴重である。

15 安田喜代門氏『國語法概說』及び『高等國語法』、『國學院雜誌』第三十七卷第八號の同氏が「九州方言からの一視點」。『國語國文の研究』第二十七號の春日政治氏が「敬讓助動詞マラスルについて」、「放送講演集・九州方言講座」の同氏が「九州方言講座の後に」、『九大國文學』第二號の同氏「甑島に遺れるマラスルとメーラスル」。

『教育』昭和四年六月號の湯澤幸吉郎氏が「口語のマスの起原について」、『國語教育』第十五卷第一號の同氏が「狂言記の「です」の起原」、『國語と國文學』第百十號の同氏「敬讓助動詞『せ(させ)らる』の徳川時代に於ける變遷と『やんす』『やす』の本源。」吉澤義則博士『國語史概說』の「近代語の發達」。

『方言』第二卷第一號の泉井久之助氏が「淀川沿岸地方におけるドス・ダスの分布について」。

18 『口語法調査報告書』(下)七二六頁長崎縣の條で既に解釋してある。

19 松下大三郎博士が『改撰標準日本文法』や特に『標準日本口語法』で所謂「特別ラ行變格第四活段」なる觀方は面白い。山形縣東村山郡某所に實在すると云ふ化石的存在「しぇかきび」(良い氣味)は九州のと同徑路であらうが、八丈島のは萬葉の東國方言のと同じく母音轉換に由る訛形と見做す可きであらう。因に新村出博士が『東方言語史叢考』の「國語に於ける東國方言の位置」二四七―六〇頁や山田孝雄博士が『奈良朝文法史』第四章「東歌にあらはれたる特殊なる語法」五一

〇—一頁を參照。

20 『國語教育』第十七卷第一號の畠井健夫氏が「「よか」談義」。

22 池澤用太郎氏『熊本縣方言音韻語法』(謄寫版)、永田吉太郎氏『助詞資料抄』(同)。

23 若しも「nu」となると琉球的となる。從つて民撰本『華夷譯語』にある十五世紀頃のものと推定される『琉球館譯語』(東條操氏『南島方言資料』に覆刻)に見える「天晴　町奴法立的」などは本書「記錄」の項に於ても九州方言として斷ずる事は出來ないのである。

24 『熊本教育』昭和六年十月號の原田氏が「九州方言雜考」五。

25 新村出博士『東方言語史叢考』の「東國方言沿革考」三一三—七頁。

27 『民族』第四卷第貳號の安田喜代門氏が「こけ袁」などは前者の立場であり、『國語教育』第十八卷第八號の田中正行氏が「近松の淨曲に現れたる熊本縣方言」などは後者の部類に屬すると稱せよう。

28 『國學院雜誌』第三十七卷第五・六・七・八・十一・十二號、第三十八卷第一・二號の宮良當壯氏が「南島方言と九州方言との交渉」。『鹿兒島教育』第四七〇號の武山宮定氏が「薩摩語と南島語の比較」。

29 柳田國男氏『蝸牛考』の「東北と西南と」。

30 『方言と國文學』第三輯の頴原退藏氏が「ねまる考」。

31 國語調査委員會で山田孝雄博士が擔當された『平家物語の語法』上には(四四一—四頁)鎌倉時代の中央語に於て「ぬぐ」は「脱ぐ」と「貫く」との兩意を有した事が記されてあり、金田一京助氏の『國語音韻論』一六四頁には古代に於て「ヌ」と「ツ」とは同音と感じられてゐた例證が見える。

32 『口語法別記』一二七―八頁には『諸國盆踊唱歌』(實は『山家鳥虫歌』)の豐後、肥後の訛形「へい」を誤解してゐる。

33 『長崎市史』風俗編の古賀十二郎氏が「長崎方言集覽」、本山豐治氏『長崎方言に於ける外來語の硏究』(謄寫版)。

34 改造社『日本地理大系』九州篇「概說」で德田貞一博士が「九州に於ける炭田」二、福岡縣鄕土硏究會「筑豐炭坑地の習俗と方言」(謄寫版)。

35 新光社『日本地理風俗大系』第十二卷「九州地方篇上」で藤田元春博士の「人口と聚落」。

36 高野辰之博士『日本歌謠集成』卷十二「近世篇」第三篇なども大體同じ。

38 岩波講座『日本文學』で東條操氏「方言硏究の槪觀」三五頁。

39 『館友』(神宮皇學館館友會)第二百八十九號で山下邦雄氏が「薩隅方言概論」。

40 『方言』第二卷第七號の小倉進平博士が「國語特に對馬方言に及ぼした朝鮮語の影響」。

41 山口麻太郎氏『壹岐島方言集』。

42 清水平一郎『佐賀縣方言語典一班』。

43 島原第一尋常高等小學校『島原半島方言の硏究』。

44 『方言』第一卷第五號の橋浦泰雄氏が「肥前五島方言集」。

46 『三潴郡誌』第十三章第三節及び『久留米市誌』中第十八章第三節の「方言訛語」。

47 安田喜代門氏「九州方言及び琉球方言における代名詞の硏究」(『金澤博士還暦記念東洋語學の硏究』)二八七頁。

48 『國語敎育』第十六卷第九號で岡村利一氏が「豐前方言の歷史的考察と特殊な語句語法の硏究」。

49 『放送講演集・九州方言講座』の堀江與一氏が「大分縣の方言」。

50 『國語教育』第十六巻第一號で小川新一氏が「宮崎縣方言區劃と研究資料」。

51 『方言』第二巻第一號の敷根利治「寶島方言集」。

52 『方言』第三巻第七號の井上一男氏が「種子島方言研究」。

53 『鹿兒島教育』第四七〇號の上畝勝氏が「鹿兒島語の六研究とその汎論」。

54 『方言誌』第五輯なる福里榮三氏が「南方薩摩方言集」。

55 延岡町役場回答。

56 澁谷武夫氏教示。

國語科學講座（第五回配本）

昭和八年十一月二十五日印刷
昭和八年十一月三十日發行

東京市神田區錦町一丁目十番地
編輯兼發行者 株式會社 明治書院
代表者 三樹退三

東京市神田區三崎町三丁目八十九番地
印刷者 細谷祐三

發行所 東京市神田錦町一丁目 株式會社 明治書院